



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	会話形式の文章とメディア・コミュニケーション : キャラクターによるセリフのやりとりの展開を中心に
Author(s)	斉藤, 千佳; SAITO, Chika
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	修士(国際広報メディア)
Issue Date	2010-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/43829
Type	master thesis
File Information	thesis_saito.pdf



平成21年度修士論文

会話形式の文章とメディア・コミュニケーション

キャラクターによるセリフのやりとりの展開を中心に

国際広報メディア・観光学院

国際広報メディア専攻

氏名 齊藤 千佳

目次

第1章 はじめに——会話形式の文章とは	1
1.1 文章の形式.....	2
1.2 会話形式の定義.....	3
1.3 コミュニケーションの中での会話形式.....	4
第2章 会話形式とその周辺	6
2.1 文章形式の研究.....	6
2.2 会話形式のテキストを対象とする研究.....	7
2.3 フィクションの会話に関する研究.....	9
2.4 研究対象と方針.....	11
第3章 会話形式の文章の分析	12
3.1 予備分析の概要.....	12
3.2 データの分類.....	15
3.3 分析結果.....	16
3.3.1 I群：Q/A型のテキスト.....	16
3.3.2 II群：T/S型のテキスト.....	25
3.3.3 III群：その他のタイプのテキスト.....	33
3.4 考察.....	47
3.4.1 文章の対話性.....	47
3.4.2 登場人物とキャラクタ.....	51
3.4.3 文章による交話的コミュニケーションの可能性.....	53
第4章 まとめと展望	55
謝辞.....	59
参考文献.....	60
分析データ一覧.....	64

第1章 はじめに

会話形式の文章とは

新聞や雑誌、書籍、さらにはインターネット等の各種メディアを通じて、我々は日常的に「文章」に接している。

が、一口に文章と言っても、その形式は多種多様である。段落ごとに一字下げや改行を行う一般的な散文の形をとるものもあれば、箇条書きのような形もあり、あるいは文の途中でも頻繁に改行するなどして詩を連想させるようなテキストもある。

中には、このような形式の文章もある。

ねん太 そういえば、基礎年金には税金も入っているんだよね。

きん子 その通りよ。実は、給付の3分の1を、国庫負担分として、税金でまかなっているの。

ねん太 税金の割合を引き上げるといふ話は、その後どうなっているの？

きん子 鋭い質問ね。3分の1を2分の1に引き上げる予定なんだけど、まだ財源のメドがついていないの。必要な金額は約2・3兆円で、消費税1%程度だけど、仮に消費税率を引き上げるとしても、なかなか難しいよね。

ねん太 でも、引き上げは、「2009年度まで」じゃなかったの？

きん子 そうよ。04年の年金改革で決まったわ。

北海道新聞で2008年に連載された、「ねん太くと学ぶ ねんきん教室」というコラム・シリーズの中の一節である。シリーズの各回とも、「ねん太」と「きん子」という二人の登場人物が年金問題について話し合うという体裁がとられている。この例のように、登場人物たちが会話しているという設定を持ち、彼らのセリフを中心に構成されている文章の形式は、一般的には「会話形式」と呼ばれ¹、新聞各紙のほか雑誌や書籍でも広く利用されている。マスメディアに接して生活している人ならばおそらく誰でも、このような形式の文章に一度ならず触れたことがあるだろう。

しかし、改めて考えてみると、この会話形式とは何なのだろうか。ドラマの台本のよう

¹ 術語として成立しているわけではないが、一般的な言語使用の中で「会話形式」という用語はよく使われている。例えば、マツアリーノ（2007: 76）、松尾（2007: 236）を参照。

な実用的な必要性があるわけでもない、あくまで読むためのものである新聞のコラムが、登場人物のセリフとして記述されることに、一体いかなる意味があるのだろうか。

この素朴な疑問を糸口として、本稿では、メディア・コミュニケーションにおける会話形式の文章について論じてみたい。

1.1 文章の形式

会話形式は、文章形式の一種である。本稿における文章形式とは、文章全体をデザインする型、形式的なパターンを指す²。例えば、頭語や結語などを配した手紙文形式や、日付と天候を見出しとする日記形式、また箇条書きなども、そうした型の一つと見なすことができるだろう。

文章形式は、特定のジャンルや文体と連動して用いられることが多いが、必ずしもそれらと表裏一体ではない。小説やエッセイが日記形式で書かれたり、手紙のような体裁の日記が書かれたりすることもある。手紙文における読み手に語りかけるような言葉遣い、日記に見られる簡潔な文体も、それがデフォルト³であるというだけで、他のスタイルを選択することは可能であり、また珍しいことではない。従って、会話形式という文章形式も、戯曲のような文学ジャンルや、会話文体というスタイル上の問題から独立したものとして扱う必要がある。

しかしながら従来、このような文章全体のデザイン形式について、体系的な研究はほとんど行われてこなかった。のみならず、実践的な文章マニュアル等でも、文章形式をいかに選択するかという問題が取り上げられることは稀である。そこでは形式が所与のものとして前提されている。つまり手紙は手紙文形式、小説や意見文は散文形式で書く、といった暗黙の前提の下でそれぞれの場合の作法が説かれ、デフォルト以外の形式を用いるという選択肢が存在すること自体に注意が払われることが少ない⁴。

だが現実には、書き手は選択をしている。意識的にあるいは無意識に、いくつかの採用可

² 従って本研究の対象としては、小説の一部として組み込まれた会話文の連続等は想定していない。ただし、散文の途中に独立したテキストとして挿入されている会話形式の部分については、前後の散文との関連に留意しつつ、考察の対象としている場合もある。

³ 本稿ではこの語を、ボウグランド&ドレスラー（1981=1984）に従い、特に指定のないかぎり自動的に選択される規定値という意味で用いている。

⁴ だからこそ、デフォルトを覆すことによってテキストに新奇性を付与し、読者の関心を引くというストラテジーが機能しうるとも言える。これについては、ボウグランド&ドレスラー（1981=1984）で興味深い議論が行われている。

能な形式の中から会話形式を選び、そのパターンに当てはめて文章を生成している。とすれば、選択のための判断材料はどこにあるのか。現状では、書き手個人の経験則や好みに基づいていると考えざるを得ない。本研究の成果の一つとして、こうした判断に対する客観的な根拠を提供し、会話形式の実践的活用を学問的に裏づけることが期待される。

ただしそれは、会話形式の文章を用いることによる教育・学習効果や、読者に与える好感度といった「良し悪し」を判定するということに限らない。本稿の主たる関心は、このような形式の文章が仲立ちする作者と読者の間のコミュニケーションにある。この点については、後で詳しく述べることにする。

1.2 会話形式の定義

先述の通り、会話形式とは、複数の登場人物が会話をしているという設定の下、その人物たちのセリフを中心に構成された文章の形式を指す一般的な呼称である。しかし、実際のメディアにおけるテキストを見てみると、どのような形態のテキストを会話形式と見なし、そうでないものと区別するかは、極めて難しい問題である。

例えば、シナリオのト書きのように、状況設定や動作等を補足説明する文が混入している場合がある。こうしたセリフ以外の要素が多ければ多いほど、会話形式というイメージからは遠ざかり、散文形式との境界が曖昧になっていく。また、セリフの発話者を文字ではなくイラストで表情豊かに表示しているような例では、そもそも文章と見るべきか漫画と見るべきか判別しがたいケースもある。このように、メディア上に実践されている個別の事例を、一つの定義の下に排他的に画定することは困難であり、現実的ではない。

そこで本稿では、アダムツイク（2005）がテキストを「プロトタイプ的概念」としてとらえているのに倣い、「会話形式のプロトタイプ」を想定することとした。つまり、個別のテキストを「会話形式かそれ以外の文章形式か」判別するのではなく、「会話形式の典型に近いかどうか」という観点でとらえるのである。

会話形式の文章は、以下のような形態的特徴を備えていることが多い。すなわち、①行頭に話し手を示す標識、②スペースや記号を挟んでセリフ、③一人分のセリフが終わるごとに改行、④以上の一連の流れが相当数くり返される。これらは会話形式の文章の「中心的特徴」と見なすことができ、すべてを満たしていなければならないわけではない。これに対し、複数の登場人物が会話をしているという設定、その会話で交わされるセリフを主に構成されているという特徴は、会話形式の文章であるために「必要な特徴」と言

える。

本稿では、上記の「必要な特徴」だけでなく「中心の特徴」をも兼ね備えた、プロトタイプ的な会話形式の文章を分析対象としている。しかしそれは、その周辺に位置づけられるようなテキストをまったくの別物として締め出すということではなく、研究上の便宜のためにモデルケースを扱っているに過ぎない。

1.3 コミュニケーションの中での会話形式

前節で述べたプロトタイプにあてはまるようなテキストは、現代の日本社会において日常的に見ることができる。2009年5月に行った調査では、新聞各紙でそれぞれ2件から4件の会話形式の文章による連載が採用されていた⁵。またミヨシ(1996)は、日本で出版されている雑誌や書籍に会話形式で書かれたものが増加していることを指摘している。さらに紙媒体のみならずインターネット上でも、会話形式の文章を見かけることがある⁶。

メディアに公開される文章の書き手は、常に読者の注意を引くための工夫を凝らしている。文章形式を選択することもそうした工夫の一つだとすれば、会話形式には通常の形式すなわち散文形式を用いる場合とは異なる何らかの効果が期待されていると考えるのが自然である。そこで筆者は斉藤(2002)において、説明文を会話形式と散文形式に書き分け、被験者による読後の印象や内容の理解度をテストする実験を行った。その結果、会話形式には主旨の正確な理解を促すよりもむしろ、読者の興味関心に沿った自由な読みを許容する傾向があるということが示唆された。従って、ある話題について興味を持ち、様々な観点から考えてほしいという場合には会話形式が適しているかもしれないが、特定のメッセージの正確な伝達を目的とする場合には逆効果になる可能性があるという結論に至った。

しかしながら、この考察は、文章という言語現象の非常に限られた一面しか見ていないということを指摘しておかなければならない。話し手と聞き手との相互行為が重要な位置を占める対面コミュニケーションとは違い、文章の書き手は読み手と時間的空間的に隔てられており、使われる言葉に対するコントロールの及ぶ範囲が大きい。そのため、一般に、

⁵ 調査対象は主要3紙(朝日、読売、毎日)と北海道新聞。用語解説コラム、対談・インタビュー等を含む。なおこの調査はシリーズタイトルを有する連載に限られており、単発記事や特集等も考慮すれば、より多くの会話形式の文章が日々、新聞読者の目に触れていることになる。

⁶ 例えば、財団法人環境情報普及センターの運営する「EIC ネットライブラリ」(<http://www.eic.or.jp/library/>)には会話形式の文章による時評が連載されている。

文章とは書き手の意図する情報を効率的に伝達する手段であるという点ばかりが注目されがちである。だが、文字で書かれたテキストも「コミュニケーションの出来事」(ボウグラント&ドレスラー1981=1984)である。そしてコミュニケーションとは「送信者と受信者の共同作業」(金沢 2003)であって、書き手から読み手への情報伝達はそのうちの限られた一側面に過ぎない。書き手と読み手の間の非対面コミュニケーションの中で発生した一つの出来事として会話形式の文章をとらえるならば、テキストには書き手の伝達意図だけでなく、そのようなメディア・コミュニケーションの持つ様々な性質が反映されているはずである。

そこで本稿では、実際にメディアで公開されている会話形式の文章を質的に分析することを通じて、作者と読者がそのテキストを媒介にどのようなコミュニケーションを行っているかを考察することを試みる。このことにより、会話形式の実践的意義を問うだけでなく、言語およびメディア研究諸分野に対して一つの視野を提供し、文章とコミュニケーションに対して今後研究が進められていくための足がかりとなることが期待される。

第2章 会話形式とその周辺

この章では先行研究を参考に、会話形式の文章を媒介とするコミュニケーションについて解明するためにはどのようなアプローチをとるべきか、検討してみたい。

しかし、会話形式という文章形式そのものを取り上げ、中心的に扱った研究はほとんど例を見ない。そこでまず、会話形式に限らない文章形式全般についての研究を概観する。次に、会話形式であるということ自体は主眼でなくとも、会話形式で書かれている種々のテキストを対象に分析や考察を行っている研究の例を挙げる。対象となっている会話形式のテキストとは、ドラマの脚本や外国語会話の教材、対談・座談会記事、哲学的な対話篇などである。さらに、小説や漫画などのフィクションの中で交わされる会話の言葉に関するいくつかの研究にも注目する。

最後に、それらを踏まえ、本稿における研究対象と方針を明らかにする。

2.1 文章形式の研究

前章でも述べた通り、文章の形式を直接的に扱った研究は非常に限られているのが現状である。

ボウブランド&ドレスラー(1981=1984)はテキストの体裁が直ちに読者のテキスト型⁷に対する期待を活性化すると述べ、アダムツィク(2005)は読者とテキストとの出会いの時に最初に印象を形作るテキストの形態的特性、「形式的マクロ構造」の研究の重要性を指摘している。しかしいずれも、テキストの体裁すなわち文章形式にどのようなパターンが存在するのか、それらがどのように読者の期待や印象に関与するのかについて、具体的な分析はなされていない。

一方、文章の読解について心理学的アプローチを行った村田(1999)は、短歌形式と散文形式、百科事典形式と現代詩形式、漫画形式と脚本形式といった表現形式の違いが、読み手によるテキストの受け取りかたにもたらす効果を実験的に確かめた数少ない例である。特に脚本形式のテキストを実験材料に用いていることは注目に値するが、ここで使われた「脚本」とは、漫画のセリフ部分のみをほぼそのまま抜き出したものである。つまり絵の

⁷ ここでの「テキスト型」とは、アダムツィクの言う「テキストの種類」すなわちテキスト作成の伝承されたパターン、本稿における「ジャンル」に相当するものと思われる。

効果を測る比較対象として仮初めに加工されたものであり、そのまま読者に供される完成形としての文章ではなかった。

このように、文章形式にはどのようなものがあり、その中で会話形式がどのように位置づけられるのか、先行研究からうかがい知ることは難しい。

2.2 会話形式のテキストを対象とする研究

次に、会話形式で書かれたテキストを分析や考察の対象としている研究例を見てみると、第一に挙げられるのは、戯曲、脚本、シナリオと呼ばれるドラマのテキストに対する研究である。このジャンルのテキストは古くから文学研究の対象となってきたが、近年では言語学的な関心も多く寄せられている。中でも注目されるのは、ドラマにおいて交わされる会話が、現実の自然会話といかに異なっているかという点である。ドラマのセリフは話し言葉を研究する際の言語資料として用いられることもあるが、無論、自然会話をそのまま再現したものではありえない⁸。水原（1999）や熊谷（2003）が強調するように、ドラマのセリフは、作者が観客を意識し、物語の流れに沿って進行するように計算して練り上げた「つくりもの」である。従って、セリフの成立要件として、ドラマの中の登場人物である話し手と聞き手の関係だけを考慮するのでは不十分と言える。「典型的なドラマの談話構造は、少なくとも劇作家－読者のレベルと登場人物－登場人物のレベルの二重構造をなす」（橋内 1999: 185）という指摘にもあるとおり、現実世界にいる作者・読者間のコミュニケーションの存在が、ドラマの会話と自然会話との違いを生み出しているからである。このコミュニケーションの二重構造については、2.3 でまた触れることとする。

ドラマのテキスト以外で、頻繁に会話形式が用いられる文章のジャンルとして、外国語の教材が挙げられる。特に初級の教科書等では、学習課題である単語や文型の使用例としてモデル会話が掲載されていることが多い。川口（2005）は、ある日本語の教科書に掲載されている「本文会話」が会話として極めて不自然であることを検証し、会話教育にも文型教育にも役立つモデル会話のあり方を模索している。ここでも、作者が読者に学習項目を提示するという現実世界の事情が、登場人物のセリフに影響を及ぼしているという現象

⁸ メイナード（2001: viii）は、テレビドラマをデータとして日本語の「感情ことば」について考察するにあたり、「テレビドラマの言葉は私達が日常使っている言語とは異なる」と前置きをしている。熊谷（2003）も、「ドラマによる研究は、日本語コミュニケーションの『実態』を明らかにするものではない」と注意を喚起しつつ、データの性格を踏まえ上での分析には意義があるとしている。

が確認できる。

第三のジャンルとして、新聞や雑誌記事で見られる、対談や座談会、インタビュー等を書き起こしたテキストがある。このようなスクリプション記事は、現実に関わされた音声会話を基にしているため、一見、ドラマのセリフのように作為が介在する余地はないように見える。そこに文字化された言葉は、話し手がその場にいる聞き手に向けて発した自然な会話の言葉そのままであるかのように錯覚される。しかし当然のことながら、対談記事は、決して自然会話のコピーではない。現代日本に会話形式の言説が蔓延していることを批判したミヨシ（1996）は、こうしたスクリプションの「深刻な落とし穴」として、書き写されたテクスチュアリティが様々なしかたで不純にされやすいことを指摘している。対談の場で関わされた言葉は、完成された記事として読者の目に触れるまでに多くの手に加えられ、変形され、整えられる⁹。従って、たとえ基になった音声会話があったとしても、文章化された会話は人工物と見なすべきであって、記事の隅にしばしば記名される「構成者」の存在を無視することはできないのである。

最後に、本稿の冒頭で紹介した例のように、創作された読み物においても、会話形式は用いられる。それらは特に、新聞のコラムや雑誌記事、指南書の入門編などでよく見られるようである。対談のスクリプションのように音声会話に基づくわけではなく、基本的にはフィクションであるが、俳優によって音声化されるシナリオや、デモンストレーションとして提示されるモデル会話のように特殊な用途を持つわけでもない。あくまで文字として書かれ、文字として読まれるテキストである。その意味では、上記に挙げた三つのジャンルよりも会話形式を採用する必然性が乏しいと言え、それにも関わらず、この形式で書かれた読み物が日常的に見られるという事実は興味深い現象である。

この種の読み物がいつごろから書かれるようになったか、その起源は定かではないが、広く知られているものとしては、プラトンの対話篇まで遡ることができるかもしれない。アナス（2008）はプラトンが対話篇形式を採用することにより、登場人物たちの見解から距離を置き、自身の見解をプラトンという権威によって読者に甘受されてしまうのを回避しようとしていると考察する。後世、数多の哲学史家がその特異な形式について注意を払

⁹ スクリプションがスタイル・構成ともに様々な加工されていることは、次のような記述からも明らかである。「たとえば新聞のインタビュー記事などでも、多くの女性が自分のことばに、言った覚えのない『ね』をつけられてしまうのだ」（清水 2003: 38）「今日多くのインタビュー記事において当然のように共有されている『お行儀よく単線的に語られたかたち（を誌面化の時点でとる）』という、自然さを装った恣意」（前田 2008: 212）

うことなく、セリフの言葉を作者の見解として読み取ろうとしてきた（中畑 2008）のに対し、作者が読者へどのように働きかけようとしているかという観点でとらえていることは注目に値する。しかしながらこうした考察は、あくまで一人の偉大なる哲学者による「文学的な」工夫に対して寄せられたものであって、今日の世に広まっている雑多な会話形式の読み物に安易に適用することはできない。特にプラトンの著作の基礎には、産婆術とも呼ばれるソクラテスの問答法があり、たとえソクラテスが実際に行った対話を写しているわけではないにしろ、そのような設定が採られることには一定の内容的な必然性があるとも言えるのである。

このように、読み物としての会話形式の文章に関しては、個別の作品に対する研究の一環として、その形式の特異性と意義について言及がなされる例もないわけではない。しかしそれらはあくまで特定の作品及び作者について論ずるための一材料に過ぎず、現代のメディア・コミュニケーションにおける普遍的現象としての会話形式の文章に着目する本研究においては、また異なったアプローチが必要になると考えられる。

2.3 フィクションの会話に関する研究

会話形式の文章におけるセリフのやりとりが、基本的には人工的な会話、「つくりもの」であるという点を考慮するならば、小説や漫画等、フィクションの会話に出現する言葉に関する考察からも有益な示唆を得ることができよう。

ドラマに見られるコミュニケーションの二重構造は、会話形式に限らず各種のフィクションにおける会話にも共通して見られる。山口（1998,2007）は、小説や漫画のようなフィクションの中の会話に二つのレベルのコミュニケーションが関与していることを指摘し、作中人物同士のコミュニケーションを微視的伝達、作者と読者の間のコミュニケーションを巨視的伝達と呼んでいる。作中に実際に文字化される言葉、すなわちセリフは微視的伝達の中で交わされる発話である。が、そこにはメタレベルにおける巨視的伝達の要請が強く反映される。その結果として現れるのが、役割語や説明セリフのような「不自然なことば」なのだという。

役割語とは、例えば「そうなんじゃ、わしは知っとるんじゃ」と聞けば「老人」が、「そうですね、わたくしは存じておりますわ」と聞けば「お嬢様」が想起されるように、特定

の人物像と結びついた言葉遣い、「言語上のステレオタイプ」（金水 2003）である¹⁰。作中のセリフに役割語が使われていると、読者はすぐにその話し手の人物像をイメージすることができる。従って役割語は、人物像の説明のために余分な筆を割くことなく、効率的に物語を伝達するという巨視的レベルの要請に応える手段の一つになっている（山口 2007）。会話形式の文章のように、地の文や視覚的要素で人物像を明示しづらい場合には特に、このような役割語の利便性が発揮される可能性があると言えよう¹¹。

役割語の想起させる人物像に関しては、定延（2006）が「発話キャラクタ」という興味深い概念を提唱している。発話キャラクタとは「スタイル以上、人格未満」に位置づけられる、話し手の心内に作り上げられた「他者モデル」であって、「老人語」に対応する「老人キャラ」、「お嬢様語」に対応する「お嬢様キャラ」等が相当する。

実は発話キャラクタは、現実の日常会話でも観察することができるという。発話キャラクタはそれぞれ「得意技」を持っており、話し手は談話の中で、その得意技に応じて発話キャラクタを発動する。例えば友人にちょっとした頼みごとをする際に、「懇願」という得意技を持つ「昔の貧農キャラ」を発動し、「おねげえでございますだ」のような役割語を使う、といった具合にである（金田ら 2008）。

このように現実の話し手は、談話の流れの中で必要に応じてキャラクタを入れ替え、スタイルもそれに伴って変動させる。それに対しフィクションの中の話し手は、物語の最初から最後まで、比較的安定して同様の話体を用いることが多い。つまり、老人キャラ、お嬢様キャラといった人物像を一貫して維持する。とすれば、そのキャラクタの持つ得意技が、物語中での彼らの役割に関わってくることが大いに考えられる。例えば、老人キャラを割り当てられた人物が主人公に助言や説教をしたり、お嬢様キャラを割り当てられた人物が高慢で嫌味なライバルとして登場したりすれば、読者はそうした脇役の役割をスムーズに受け入れることができるだろう。また逆に、そうしたステレオタイプからわざと外れた役割を担わせることで意外性を付与し、読者の関心を引くという手法をとることも可能

¹⁰ 「ある特定の言葉遣い（語彙・語法・言い回し・イントネーション等）を聞くと特定の人物像（年齢、性別、職業、階層、時代、容姿・風貌、性格等）を思い浮かべることができるとき、あるいはある特定の人物像を提示されると、その人物がいかにも使用しそうな言葉遣いを思い浮かべることができるとき、その言葉遣いを「役割語」と呼ぶ。」（金水 2003: 205）

¹¹ ただし、登場人物をステレオタイプで規定してしまう役割語は、リアリティや魅力のある人物造形の妨げになる場合がある。清水（2003）は、こうした型どおりの言葉遣いはB級小説に使われるもので、深みのある小説を書こうとするときは避けると述べている。

であろう。

このように、登場人物がどのような言葉遣いを用い、どのようなキャラクタを割り振られているか¹²は、その人物が文章中で果たす役割としばしば連動する。ここにも、巨視的レベルにおけるコミュニケーションの要請が影響を及ぼしていると考えられるべきであろう。

2.4 研究対象と方針

ここまでに見てきた先行研究から、本稿では、次のような研究方針を提起する。

まず本研究では、会話形式の文章の中でも、現代日本において一般向けの読み物としてメディアに公開され、かつフィクションであるようなテキストを対象として分析を行う。ジャンルによる必然性の乏しい中であえて会話形式を選択して書かれたテキストは、デフォルトとして書かれたものよりも、この形式の持つ性質をより積極的に活用していると考えられるからである。そうした性質を質的な分析によって抽出した上で、関連分野の研究における知見とも照らし合わせつつ、考察を加えていく。

分析にあたっては、登場人物のセリフのやりとりを注意深く観察し、巨視的レベルのコミュニケーションの影響を読み解いていく。これにより、作者と読者が会話形式の文章を仲立ちとして行っているコミュニケーションの様態について、その一端を明らかにすることができるとは思われる。

とは言え、文章とは元来、様々な要素が複雑に絡み合って成立しているものである。前節でも見たように、コミュニケーションの二重構造が及ぼす影響は、使用される語彙やスタイルだけでなく、キャラクタの割り振りのような設定上の問題にも広く関与している。そうした多くの要素のうち、いずれに注目して分析を行うべきかについて、次章で改めて検討することとしよう。

¹² 以後、特定の振る舞いに対応する人物像を定延（2006）に従って「キャラクタ」と表記し、「登場人物」とほぼ同義で使われる一般的な用語としての「キャラクター」とは区別する。

第3章 会話形式の文章の分析

会話形式の文章は、書き手と読み手の間に、どのようなコミュニケーションを成立させるのか。この点を明らかにするため、実際にメディア上に公開されたテキストを対象に、架空の人物たちによるセリフのやりとりを質的に分析し、そこに影響を与えている巨視的レベルのコミュニケーションについて考察を行った。

セリフに現れる巨視的コミュニケーションの影響は、語彙や文体のみならず発話内容、談話の流れや人物・状況設定など、幅広い範囲に及んでいる。そこでまず予備分析を実施し、そうした様々な要素のうちから特に注目すべきものを選び出した。中でも興味深かったのは、登場人物による予定調和的なやりとり¹³であり、この傾向はテキストの性格によって、顕著に見られる場合とそうでない場合があることが明らかとなった。

この結果を踏まえ、本分析では、登場人物同士の役割関係からデータを暫定的に3群に分類し、それぞれのグループに特徴的な会話の展開のパターンや登場人物へのキャラクターの割り振りを中心に分析と考察を試みた。

3.1 予備分析の概要

本分析の焦点を絞るための事前準備として、会話形式の文章に見られる様々な要素を大まかに把握するための予備分析を行った。分析対象は、新聞4紙、雑誌2誌、書籍2冊から収集した計8本の会話形式の文章であり、セリフ部分だけでなく見出しやリード文なども含んでテキストデータ化した。これらのデータにおける登場人物同士のセリフから、巨視的コミュニケーションの影響が見られる要素を抽出し、以下のように整理した。ただし、ここで言う巨視的コミュニケーションの影響とは、必ずしも作者の狙いを反映しているということに限らない。たとえ作者自身が意図していないとしても、読者との間のコミュニ

¹³ 哲学者ライプニッツによれば、世界は能動的力を有する無限個の単子（モナド）から成り、各モナドは互いに独立するものでありながら、規則正しく対応し合っている。「それは神が個別的物（モナド）の間関係をすべて初めから定めており、すべての現象は合法的、合目的に進行するよう調和的に秩序づけているからである」（下中 1971: 1435）。本稿において「予定調和的」と言うのは、このように相互に独立しているはずのもの同士（登場人物たち）が、ある超越的な力（作者）によって調和的に振る舞う様子を指している。従って、「予測どおりの筋書き」を表す俗語としての使用とはひとまず区別する必要がある。

ケーションのレベルにおいて何らかの働きを持つと考えられる場合を広く含めている。

A) 話し言葉的表現

一般に公共の文章ではあまり用いられないくだけた表現や情意表現、文末モダリティ、フィラー等が見られた。

B) 書き言葉的表現

一般に日常会話ではあまり用いられない硬い言い回し等が見られた。また、括弧書きなど、音声化できない記号等を用いた表現も見られた。

C) スタイルによる個性づけ

役割語や、敬体と常体による区別等、発話スタイルによって登場人物の個性づけを行っている例が見られた。

D) 長ゼリフの間の“谷”

説明ゼリフ等で、一人の話し手が長いセリフを話す際に、聞き手があまり重要性のない、ごく短いフレーズを差し挟む例がしばしば見られた（例えば、Data3-3 や Data7-42 等）。長ゼリフが分割され、その間に空白部分が生じることで、紙面上の活字の並びに谷間が出来たように見える。

E) 人物・状況設定の暗示

セリフの中でさりげなく登場人物の人間関係や人物像に関する情報が提示される様子が見られた。例えば、聞き手に「先輩」と話しかける（Data4）、「ねん太君に近い1985年生まれの人」（Data1）等が挙げられる。

F) 人物間の立場の違い

登場人物の設定には、いずれのデータにおいても、話題となっている事柄についての人物間の対立構造が組み込まれていた。特に多いのは、その事柄に関する知識・情報量の差、すなわち「知る者」と「知らざる者」の対立である。しかし中には、必ずしも知識や情報量の問題ではなく、その事柄に対する各々の関わりかたの違いが見られる場合（Data6）もあった。

G) 質問

データの中に出現する質問は2種に大別できる。一つは、話し手が知らないことを聞き手に尋ねるための質問である。もう一つは、ちょうど教師が生徒に向けて尋ねるような、話し手がすでに答えを知っていながら聞き手を試すために質問するケースで

ある。後者の場合、聞き手は誤答もしくは不十分な応答しか返すことができず、それが話し手の知る模範解答へと修正されていく展開が付随することが多い。

H) サクラ

あまりにも当意即妙な質問をしたり、理想的なリアクションを返したりといった、所謂「サクラ」的なセリフがしばしば見られた。前項における試問に対し、後で訂正されるための逃れ向きの誤答がなされる場合も、その一種と見ることができるだろう。

I) 読者への配慮

登場人物たちは時に、既に知っているはずの情報をあえて再確認するようなセリフを発する。これは読者の知識レベルに配慮して、読み進めるために必要な情報を提示しているものと推測される。また、一般の読者が抱くであろう感情を登場人物が代弁しているように思われるセリフ（Data7-30等）も見られた。

J) 提言

文章全体の主旨や中心的主張を明言したり、問題を総括したりするようなセリフが終結部に現れるケースが見られた。

なお、一つの要素に対し必ずしも一つのセリフが結びついているわけではなく、上記の項目に重複してカウントしたセリフや表現も多数あったことを付記しておく。

さて、この結果から、以下のような点を指摘できる。まず、これらの要素のうちいくつかには、会話性の強調と可読性の確保という二つのベクトルが作用しているように思われる。複数の人物による会話という設定をとる以上、話し言葉などによる「会話らしさ」は必要不可欠であるが、一方で文章である以上は、文字言語としての読みやすさも要求される。そのため、簡潔な書き言葉的表現を用いたり、微視的レベルの会話としては不必要な言葉で長ゼリフを区切ったりといった、音声会話の忠実な再現とは異質な要素も観察されたのではないかと推測される。

また、登場人物の設定やそこに組み込まれた立場の違いは、テキストの中に複数の視点が対立していることを示しており、その中には想定読者の視点や作者の視点も紛れ込んでいる様子が見て取れる。一方で、そうした読者への配慮や作者自身の主張を織り込むように談話をコントロールしている統一的な視点もまた、対立する複数の視点とは別のレベルに存在している。それを最も明瞭に示していたのが、誤答を引き出す試問やサクラ的なセリフであり、これらの要素が現れる場面では、あたかも登場人物たちが結託して一定の方

向へ話を運んでいくような展開が見られた。このように、テキストに仕組まれた複数の視点が統一的な視点からコントロールを受けることにより、登場人物たちが各々役割を分担しながら予定調和的にやりとりを展開するという会話形式独特の傾向が生み出されている可能性が示唆された。なお、このような展開は、対立する視点が特定の主張へ向かって収斂していくタイプのテキスト（Data4,5,7）で顕著だったのに対し、人物たちが各自の立場を保持して意見交換しあうケース（Data6）ではあまり目立たなかった。

複数の話し手による予定調和的なやりとりは、散文形式には見られない会話形式ならではの現象である。そこで本分析では、登場人物たちがどのように役割を分担し、やりとりを展開させているかという点に注目し、より詳細な考察を行うこととした。

3.2 データの分類

予備分析において、特定の主張に収斂するか否かという意味でのテキストの性格とセリフのやりとりの展開には関連性があることが示唆された。しかしテキストが収斂しているか否か、その程度が強いか弱いかを、客観的に判定することは難しい。

そこで本分析では、一つの目安として、「登場人物の役割関係」に注目することとした。これは、予備分析で予定調和的展開が顕著に見られたデータにおいて、登場人物たちが概ね「教える／教わる」という二項対立の関係を持っていたことに基づいている。

分析対象として、予備分析で用いた8本のデータに加え、新たに新聞2紙、雑誌2誌、書籍1冊、リーフレット1冊から収集した6本の会話形式の文章を採用した。合計14本の文章は見出しやリード文も含めてテキストデータ化し、微視的レベルにおける登場人物の役割関係から暫定的に以下の3群に分類した。ただしこの分類は便宜上のものであり、実際に個々のテキストを見てみると、複合的な例や境界的な例も含まれている。

I群：質問者と回答者の会話	： 6本
II群：教える人と教わる人の会話	： 4本
III群：その他	： 4本

このI～III群において、登場人物のセリフのやりとりがそれぞれどのように展開されているかを分析した。さらに、登場人物の役割関係を重視することから、そのキャラクターがどのように設定されているかという点についても注意を払いつつ、考察を行うこととした。

3.3 分析結果

以下、三つの群のデータそれぞれの分析結果と、そこから考察される巨視的コミュニケーションの特色について順に述べる。

3.3.1 I群：Q/A型のテキスト

微視的レベルにおいて登場人物がそれぞれ質問者（以下Q）と回答者（以下A）の役割を分担しているタイプのテキストは、主として時事解説コラムなどの説明的な文章に多く見られる。特徴として、質問－回答という隣接ペアの連続によって構成される比較的単純な談話構造を持つことが挙げられる。

[Data11]

- 1 **アトム** 「エコポイント」って、なんですか？
- 2 **デスク** 消費電力が少ない冷蔵庫やエアコン、地上デジタル放送（地デジ）対応テレビを買った人が、購入額の一部を「点数（ポイント）」として受け取り、次の買い物の際にポイント分を値引きしてもらえる制度だよ。このポイントを「エコポイント」と呼び、5月15日の購入分からもらえる。ただし、2009年度の補正予算が国会で成立することを条件としているんだよ。
- 3 **ウラン** どんな仕組みなのかしら？
- 4 **デスク** エコポイントがもらえるのは、省エネ性能が優れている冷蔵庫、エアコン、地デジ対応のテレビだ。冷蔵庫とエアコンは購入価格の5%程度、地デジ対応テレビは購入価格の10%程度と、購入時に同種の古い家電製品をリサイクルした場合はリサイクル料分が、共にエコポイントとしてもらえる。これは、5%程度から十数%の値引きをするのと同じだね。例えば、30万円の地デジ対応テレビを買った場合は、約3万円程度と、リサイクル料分のポイントがもらえる。
- 5 **アトム** 何に役立つの？
- 6 **デスク** エコポイントをきっかけに、電力をたくさん使う家電製品を、電力を節約できる新製品に買い替える人が増えれば、日本全体の省エネルギーが進むね。そうすればCO₂の排出量が減って、地球温暖化の防止に役立つ。買い替えが活発になれば、不況が続く中で、景気対策の効果も期待できる。
- 7 **ウラン** 対象の製品になにか目印はつくのかしら？

8 デスク 政府が1日に発表したステッカーが付くことになった。「エコポイント対象商品」と書いてあるので、一目でわかるよ。

上の引用は、新聞に掲載されている時事解説コラムの冒頭部である。ここでは「アトム」と「ウラン」がQを、「デスク」がAを担当し、エコポイント制度というテーマについて会話をしているという設定になっている。各人物名の前に付した数字は、当該データに出現するセリフの通し番号である。

微視的レベルのコミュニケーションとして見たとき、このやりとりの不自然さは一目瞭然である。第一に、この会話では、質問と回答以外の要素がほぼ完全に欠落している。もし自然会話であれば、たとえ質疑応答のような場においても、前置きや感謝の言葉、相手の発言へのリアクションなど様々な要素が混入するはずだが、このテキストにおける話し手たちはそうした聞き手への配慮を示すことをほとんどせず、質問または回答というそれぞれの役割にのみ徹しているように見える¹⁴。また三者会話でありながらQ二人のセリフが続くことがなく、常に「(Q→A) → (Q→A)」という順序が維持されること、Qの二人とAとのセリフの長さに明確な差異があることも見て取れる。

さらにQの二人のセリフに注目してみると、その質問内容は必ずしも直前のAの発言から派生しているというわけではなく、個々の質問は相互に独立しているように見える。また、自分の問いに対するAの回答にはまったく反応を示さず、基本的に“尋ねっ放し”である。QとAの対立とは、ごく自然に考えれば「知らざる者」と「知る者」の対立であり、Qは「知ろう」という動機に従ってAに質問しているはずなのだが、このやりとりを見るかぎりQが本当にその疑問を解決したいと思っているのか、疑わしい。以下の Data11-11 及び 13 の質問に対するAの回答は、彼らの疑問を解くには不十分であるはずで、何らかの反応を示して当然の場面のように思われる。しかしQは、何ら頓着する様子も見せず、早々に次の質問に移ってしまう。

¹⁴ この群のデータに、質問・回答以外のセリフが皆無であるというわけではない。例えば、Data1-9 や Data3-3 といったQのセリフは質問ではない。これらは、予備分析で指摘した可読性を確保する“谷”を形成するフレーズとして機能しているものと見られる。また Data11-19 ではQが唐突に相手の発言へのリアクションを示すが、それ以後のやりとりが急激に一つのメッセージへ収斂し、II群のテキストへの類似性を垣間見せることは注目に値する。

[Data11]

- 11 **ウラン** 購入後、どうやってポイントをもらうの？
- 12 **デスク** じつは、その手続きはまだ政府が検討中なんだよ。
- 13 **アトム** エコポイントは何に使えるの？
- 14 **デスク** それも、まだ検討中。「次に別の省エネ製品を買うときに使えるようにしよう」とか「いや、どんな製品を買うときでも使えるようにしよう」とか、様々な意見が出ている。
- 15 **ウラン** エコポイントで、CO₂の発生は、どのくらい抑えられるの？

川口（2005）は、ある日本語教材のモデル会話について、登場人物の動機が一貫していないこと、相互行為になっていないこと（相手の働きかけに反応しない、相手の反応を待たない等）が不自然さの原因となっていることを指摘している。このような人工的会話ゆえの不自然さが、この Data11 にも共通して見られると言えよう。

次に引用する Data8 は、同じく新聞のコラムであるが、登場人物名が2度目の発話からそれぞれ「Q」「A」と記載され、より役割を強調した表示になっている。

[Data8]

- 1 なるほドリ ジェネリック医薬品って、聞き慣れない言葉が新聞に出てたね。
- 2 **記者** 日本語でいう「後発医薬品」のことです。薬には、特許を取った新薬（先発薬）と、後発薬とがあります。新薬の特許は20年から25年で切れるため、その後に別の製薬会社と同じ成分で作るのが後発薬です。新薬をまねる後発薬は開発費が少なくてすむので、価格は新薬の2～7割になります。
- 3 **Q** どう違うの？
- 4 **A** 薬の成分は先発薬と同じですが、固めたり、着色したりする添加剤は異なる場合があって、健康被害につながる心配がゼロではありません。以前は「後発薬は体内で溶けにくい」という指摘もありましたが、今は溶解の試験にも合格した薬だけが流通しています。長期間薬を飲み続ける患者には薬代が安くすみ、高齢化で増え続ける医療費を抑えることにもつながります。
- 5 **Q** じゃあ、かなり普及してるのかな？
- 6 **A** 必ずしもそうではありません。日本での普及率は医療用医薬品全体の約17%です。

これに対し欧米は5割前後に達しています。政府は12年度までに30%に引き上げることが目標にしている、その間の医療費を約5000億円減らせると見込んでいます。

この例では、Data8-5で「じゃあ」という接続により前のセリフとの関連を示す¹⁵など、Data11に比べるといくらか聞き手との相互行為を思わせるような部分も垣間見ることができ。が、Qによる極端に簡潔な質問と、それに続くAのやや長い回答、この繰り返しが終始するという点は共通している。Data8-1は明確な疑問形になっていないが、「記者」の説明を引き出しているという意味では、実質的に質問と変わらない機能を持っていると言えるだろう。

このように見ていくと、微視的レベルにおけるQの役割は質問というよりもむしろ話題を振ること、Aが話し出しやすくするために水を向けることにあるようにも思える。実際、Qは「Q自身の知りたいこと」ではなく、「Aが話したがっていること」を察して質問しているかのようである。

見出しとしての質問

このようなやりとりを巨視的レベル、すなわち作者と読者の立場から俯瞰して見ると、興味深い事実を観察できる。それはQのセリフが常にAのセリフの先触れになっているということである。Qのセリフは質問である以上、必然的に回答であるAのセリフに先行する。時事解説のコラムにおいて、Aの回答とはすなわち説明である。読者は、テーマに関する説明内容をAのセリフから読み取る前に、Qのセリフによる導入を経る。例えば先に引用したData11及びData8の冒頭部について、Qの質問の後に続くAの説明内容はそれぞれ以下のようにまとめることができる。

[Data11]

Q 「エコポイント」って、なんですか？

A <エコポイントとは何か>の説明

Q どんな仕組みなのかしら？

¹⁵ もっとも、ここでの「じゃあ」による関連付け自体が自然なものであるか否かは別問題である。個人差はあるだろうが、少なくとも筆者は、この「じゃあ」に続く質問が直前のAによる説明から自然に発想される疑問であるという印象は受けなかった。

A <エコポイントの仕組み>の説明

Q 何に役立つの？

A <エコポイントの意義>の説明

Q 対象の製品になにか目印はつくのかしら？

A <エコポイント対象商品の見分けかた>の説明

[Data8]

Q ジェネリック医薬品って、聞き慣れない言葉が新聞に出てたね。

A <ジェネリック医薬品（後発薬）とは何か>の説明

Q どう違うの？

A <後発薬と先発薬の違い>の説明

Q じゃあ、かなり普及してるのかな？

A <後発薬の日本における普及の状況>の説明

一見して明らかのように、テキストの本旨である説明はすべてAの回答の中でなされている。つまりテーマに関する情報を得るためには、Aのセリフだけを読んでも事足りるのである。従ってAのセリフを本文と見なし、その前に置かれるQのセリフは、質問という形を借りた「見出し (index)」であると見ることも可能である。見出しならば、それ以前の話の流れに必ずしも沿う必要はなく、むしろ話題転換の目印となっても一向に差し支えない。また、極端に簡潔であることもまた、見出しとしての機能には即していると言えるだろう。

「問う他者」の創出

微視的レベルにおけるQの質問は、巨視的レベルにおいては本文に前置される見出しである。このように考えたとき、一つの問題が生じる。それは、見出しが質問という形を取ることには何か意味があるのか、それともただのレトリックに過ぎないのか、という問いである。この問題は、見出し付きの（散文の）説明文ではなく、会話形式の文章の一類型をとることにどのような意味があるのか、という問題と直結する。

ここで今度は、回答者Aについて見直してみよう。既述の通り、Aは説明的な文章の中に登場する説明者であって、テキストの主旨を担っている。微視的コミュニケーションに

おけるAの発話には、Qとは違って、明確な動機がある。Qからの質問に答える、という動機である。もしも質問がなされなかったら、Aは回答という形をとることができず、さりとして読者への説明という巨視的レベルの目的は果たさなければならず、結果として「問わず語り」という形をとらざるを得なくなる。答えないAはもはやAではなく、作者の分身である一人の話し手である。

ところで説明するということは、潜在的に「問う」ことを内包している。「～について説明する」とは「～とは何か、を説明する」ことであり、「～の理由を説明する」とは「～はなぜなのか、を説明する」ことである。散文による説明的な文章でも、このような潜在的な「問い」を自己引用という形で顕在化させている例が時折見られる。

この違いはどこからくるかといえますと、欧米では家は資産なのですが、日本では家は消耗品のガラクタだからです。欧米では住宅ローンは、おもに家の資産価値に対して貸すもので、日本の住宅ローンは、おもに人の支払い能力に対して貸すものだという違いです。
(マッツァリーノ 2007: 206)

つまり説明とは、潜在的なものであれ顕在化したものであれ、「問い」に答えることによって成し遂げられるのである。たとえ問う他者がいなくとも、語り手は自ら問いを立てることで、他者への説明を引き出すことができる。とは言えやはり、答えとしての説明は、本来的には他者に向けられるべきものであることは間違いない。Qという質問者の存在意義は、ここにある。Qは説明を引き出すための問いを発し、答える言葉を受け止めてくれる「相手」として、Aの前に立ち現れるのである。

いかなる種類のコミュニケーションにも相手は不可欠である。作者がマスメディアを通して説明的な文章を発信するときに相手としているのは、現前しない不特定多数の読者であり、しかも執筆の時点ではまだ存在すらしていない。このようなとらえどころのない相手に向けられる言葉は、畢竟、問わず語りの独話にならざるを得ないが、これは説明という言語行為の本来の性質には合わない。会話形式をとることで微視的コミュニケーションのレベルをテキストに組み込み、Qという仮想的な「相手」を創出することは、この問わず語りを回避するために有効な手段であると考えられることができる。

ただし注意すべきは、Qはあくまでテキスト世界すなわち微視的レベルにおける話し手Aの「相手」として創られるのであり、現実世界の作者の相手ではないということである。

巨視的レベルから見れば、QのセリフはAのセリフと同一の言語主体、すなわち作者自身から発せられている。両者とも同じ作者の意識でつながっているため、QはAの言いたいことだけを都合よく質問できる一方、説明に対するリアクションや聞き手への配慮は不要となる。このような作者の意識を介した意思疎通は時折、QがさりげなくAの説明を補足するといった形で表面化する。Data3-9、Data2-7などはその好例である。

[Data3]

- 7 ホ 今は「凍結」なのか？
- 8 A 舛添厚労相が「意図は善意でも終末期医療を後退させる危険性がある」と判断し、6月25日に、この診療報酬を決めた中央社会保険医療協議会（中医協）に諮問した。「やむをえない」という答申が出て、「別に厚労大臣が定める日」までは、無期限凍結となった。
- 9 ホ 終末期の医療について、患者の意思を尊重すること自体が否定されたのではないじゃろう。いつかは「解凍」されるのか。
- 10 A 舛添さんは中医協に対し、今年度中に相談支援の実態調査をし、結果をまとめるよう要請した。相談支援が75歳以上の患者に限定されたために不安を招いた、という反省もある。年齢にかかわらず、がんで終末期を迎えるといった人にも対象を広げ、再実施できるかどうか議論する予定だ。

[Data2]

- 5 由美 それって何。
- 6 理香 直訳すると「活動家ファンド」。「物言う株主」として経営側に積極的に注文をつけるのよ。企業価値に比べて株価が割安の上場企業の株を一定程度まで買い増した上で、株主として経営改善や増配などを求めようとするわ。
- 7 由美 経営側にとっては、態度が高圧的に見えたり、経営の弱点をつつかれたりして不快よね。
- 8 理香 高値で株を売り抜けることだけを目的にされると、経営は混乱する。本家の米国でも「グリーンメーラー」（株を買い占め高値で売り抜ける者）と批判された例があったわ。

QとAの関係は、説明を受ける者とする者という一面だけを見れば、現実世界の読者と作者の関係を投影しているかのようにも思える。しかしここまでの例から明らかなように、

QはAと同じ作者の分身であって、読者の代弁者ではない。Qは常にAに協力的に振る舞い、その質問はAによる説明を引き出すきっかけ（cue）として機能するのである。

作者の分身の外在化

作者が心の中で自問自答するとき、問う自分と答える自分の境界は曖昧である。しかし自己の分身をQやAという役割を担った登場人物として外在化するためには、それぞれに個別の人格を与え、互いを明確に区別する必要がある。

下表は、この群のデータ6本の登場人物の概要である。

表 1

	説明項目	Q	A
Data1	年金	ねん太（20代男性）	きん子（年長の女性）
Data2	ファンド	由美（出版社でアルバイトしている女性）	理香（経済シンクタンク勤務の女性、Qの友人）
Data3	終末期医療	ホー先生（年配のフクロウ）	A
Data8	後発薬	なるほドリ（鳥）=Q	記者=A
Data10	大豆	サユリ（営業OL・1年目） ヒロコ（事務OL・1年目）	栄養士のミナミ先生（35歳）
Data11	エコポイント	アトム（10万馬力と、純粋な心を持つロボット） ウラン（アトムの妹ロボット）	川戸直志デスク（経済部）

各登場人物（動物も含む）には名前が与えられているが、一部は役割を示す記号や役職名である。また、Data2 以外は場面説明がなく、Q-A間の会話の文脈となる状況が不明である。Aには記者や栄養士など、回答者として現実味のある立場が設定されているのに対し、Qの人物設定には比較的自由度があり、虚構性が高いようである。

女性の登場人物の多くは「女性語」を用い、Data3 のQは「老人語」を用いるなど、役割語による個性づけも観察された。またそれほどステレオタイプ的でなくとも、各登場人物の言葉遣いは、敬体であったり、断定調であったり、やわらかな文末表現であったりといった特色を持ち、かつ終始一貫していた。このように安定した発話のスタイルを用いる

ことで、流動的な作者の分身は安定したキャラクタをまとい、作者とは一応独立した虚構の人格として実体化される。

もっとも、この群のデータにおける登場人物たちは、後述するⅡ群やⅢ群と比べると全体的に個性が乏しく、役割とキャラクタとの結びつきが弱いという一面も見られた。例えば Data10 では、Qである「ヒロコ」と「サユリ」はいずれも若い女性キャラであり、共に際立った個性は見られない。そのせいか、以下の Data10-1 と 3 の間で話し手の名を入れ替えても、あるいは一人が続けて質問したことにしても、特に支障をきたさないように思われる。

[Data10]

- 1 ヒロコ●大豆って、わりと周期的にブームがやってきますよね。どんな栄養成分が含まれているんですか？
- 2 先生●大豆は、特に女性にたくさん摂ってほしい食品なんです！ 大豆はカラダの素となる良質なタンパク質を多く含み、またイソフラボンという、女性ホルモンの分泌低下を補う作用のある成分も豊富。女性ホルモンに関連して起こる乳がんなどの病気の予防にも効果があるといわれています。さらに、血行をよくし、健康な肌を保つのに効果があるとされるレンチンや、腸のリズムを整えて消化吸収を助けるオリゴ糖も含まれていたり、大豆ってものすごく優秀な食品なのよ。世界的にも、ヘルシーな食材として大豆やお豆腐が注目されているし、私たちも負けずに大豆や、大豆製品を食べるようにしましょうね。
- 3 サユリ●お豆腐はよく食べるのですが、大豆は、なんかめんどくさいイメージがあって。簡単に食べられる大豆料理を教えてください。
- 4 先生●大豆の水煮は、いろんな料理に仕えて便利なんですよ。そのままスープやみそ汁に入れてもいいし、サラダの中に加えてもおいしいし。ごはんを炊く時に大豆の水煮を入れて、しょうゆと酒を少し加えれば、簡単に、大豆の混ぜごはんができあがります。

また Data11 でも、「アトム」は男の子キャラ、「ウラン」は女の子キャラとしてスタイル上は区別されているものの、Qとしての両者の間に役割の違いは見られず、どちらがどの質問をしても差し支えがない。他にも Data3 において、一般的に説明する側の役割を担うことの多い老人キャラ（博士キャラ）の「ホー先生」がQを担当しているなど、登場人物のキャラクタ設定にあまり必然性が見られないのもこの群のテキストの特色と言える。

3.3.2 II群：T/S型のテキスト

この群のデータにおける登場人物の役割関係は、教える人（教師役、以下T）と教わる人（生徒役、以下S）とも言うべき二項対立を基礎としている。「知る者」と「知らざる者」の対置という点ではI群に似ているが、QとAによる一問一答式のやりとりに比べ、TとSは一つの問題をめぐるより複雑で活発なやりとりを展開する傾向がある。

次のData5は、日本語教育の実習生である「実帆子」「習太」（S）と、指導教官である「導夫先生」（T）の三者会話という設定で書かれている。

[Data5]

- 13 導夫先生●ところで、この授業の目的は何ですか。
- 14 実帆子●学習した文型を使って依頼ができるようになることです。
- 15 導夫先生●文型を使ってたくさん話せば、実際に依頼ができるようになりますか。
- 16 実帆子●え？
- 17 導夫先生●例えば、改まった相手に何かを依頼するときに、いきなり「～てください」って依頼しますか。それに、断るときにはっきり断りの表現を使いますか。
- 18 習太●それは失礼ですね。まずは理由を言ったりするかな。
- 19 実帆子●その前に「すみません」とかって言うかも。
- 20 習太●そうか、文型を使って話すだけじゃ、実際の場面では使えませんね。
- 21 導夫先生●いろいろな文型を出しても、それらをいつ、誰に、どのように使うのかがわからないと、使えないですよ。
- 22 習太●そうか。学習者は、相手がどんな人だからどんな表現を使うとかって、全然わかってないですね。
- 23 実帆子●文型が言えるようになること以外にも、いろいろ必要なんですね。

Data5-13,15,17では、TからSに向かって連続して質問が繰り返されている。しかしこの質問は、I群におけるQの質問とはまったく異なる性質を持っている。Tの質問は、自らの情報の不足を補うためではなく、Sの認識を確かめ、誤りを指摘するために発せられた試問である。従ってSの回答によって決着することはなく、むしろその回答に現れた問題点をさらに追及する次の質問が後続する。このように、テーマについて「知らざる者」

から「知る者」への質問ばかりでなく、知識の優っている方からの質問も見られるというのが、この型のテキストの特徴の一つである。

下に引用する Data9 においては、「女」が T、「男」が S の役割を負い¹⁶、NAT という血液検査法について話している。S によるセリフ Data9-3 は、I 群にも見られたような説明を引き出す質問と言えるが、これに対する T の回答は途中で遮られてしまう。説明が完結しないままやりとりは進行し、T から 2 つの質問 Data9-6,8 が発せられるが、こちらは S が NAT の理解に必要な知識をどの程度持っているかを確かめる試問となっている。

[Data9]

- 1 男「……」
- 2 女「ホントはよく分からないんでしょ？」
- 3 男「うん…ナニ？ ナットって。」
- 4 女「N A T は Nucleic acid Amplification Test の頭文字で“ウイルス核酸増幅検査”って意味…」
- 5 男「じゃ、オレ今日はこれで…」
- 6 女「最後まで聞いてよ、ここからが大事なんだから！いままで血液のウイルス検査の方法は？」
- 7 男「確か…抗原や抗体検査だよな。」
- 8 女「ピンポ～ん、やるじゃん！でそれを具体的に説明すると？」
- 9 男「と来ると思ったんだよな～。分かりません！」

この例のように、T には I 群における A とは異なり、相手からの質問に答えるだけでなく、より積極的に「教えよう」とする態度が見て取れる。

一方の S も、T の発話に対してリアクションを示すという点で、常に A に先行して話を振る Q とは異なった振る舞いを見せる。例えば、S は T の試問に答えたり (Data9-7)、難しそうな説明に拒否反応を示したり (Data9-5) といった様子が見られる。こうしたリアクションに対し T もまた反応を返すことでセリフが連鎖し、やりとりが展開していく。

¹⁶ Data9 では各セリフの話し手が名前ではなく、イラストで表示されている。本稿での引用の際はそれぞれ「女」「男」と表記することとした。イラストで描かれた表情や身ぶりなどといった視覚的要素がどのような機能を持つかという問題も非常に興味深いのが、ここでは割愛する。

Sによるリアクションには、あたかもTと予め示し合わせているかのような、サクラ的なセリフがしばしば紛れ込んでいる。特に、上に述べたような試問に対して、理解が不十分であることを示すような応答を返し、自然とTによる講義が始まるような流れを誘発するようなケースが多く見られる。

[Data7]

- 21 ご隠居「社会は悪くなったと思うかね」
- 22 熊さん「思いますね。テロ、ピッキング、外国人犯罪、北朝鮮、BSE、SARS、鳥インフルエンザ、それに少年犯罪の凶暴化。日本はどう考えてもヤバイ」
- 23 ご隠居「どうしてこう不安や恐怖が増えたんだろうね」
- 24 熊さん「事実そうでしょう？」
- 25 ご隠居「ちょっと目先を変えたとね、そういう全体的なムード自体が、じつは一番危ないと思うのだ」
- 26 熊さん「えっ、どういうことです」

Data7-22,24は、Tである「ご隠居」の問いかけに対してSである「熊さん」が応じたセリフである。このSの見解は25のTのセリフによって否定され、さらにSは26で、その詳しい説明をTに求める質問を發する。このようにして表明されたSの理解不足は、Tが自説を滔々と解説するための導入となっているのである。

その一方で、SはTの発言に対し、極度に的を射た応答を見せることもある。同じデータの後半には、次のような場面が出てくる。

[Data7]

- 31 ご隠居「たとえば、銃所持者の数でいえばアメリカよりカナダのほうが『銃社会』だ。だが銃による殺人はアメリカが圧倒している」
- 32 熊さん「どうしてですか？」
- 33 ご隠居「アメリカが、つねに恐怖をかきたてつつ、隣人への不信感を煽っているからだと思わざるをえない。アメリカの殺人率は20%減っているのに、殺人事件のニュース報道は600%増加しているという指摘もある」
- 34 熊さん「不安の原因は『恐怖の過剰生産』。日本もそうなっていると？」

Data7-34 でSはTの説明の要点を鋭く察し、的確な言葉で表現し直して提示している。このような、あまりに当意即妙に思えるセリフも、SがTのサクラとして振る舞っているように見える一つの要因となっている。

概してSのサクラ的セリフは、冒頭部もしくは前半においては理解の欠如から出る誤答が、後半では過剰なまでに理解の速い“合いの手”が、それぞれ現れやすいという傾向がある。すなわち、Sはまず不十分な理解を示すことで、Tによる詳しい解説を引き出し、次に的確な合いの手を入れることで、Tの話のスムーズな展開をサポートする。

このようにTとSも、微視的レベルにおいては互いに独立した人格を持つはずでありながら、Q・A以上に協力的な連携を保ち、予定調和的とも言えるやりとりを展開させていくのである。

対立解消のストーリー

ライプニッツの予定調和説においては、「神」という超越的な存在によって個々別々のモナドの関係が秩序づけられていた。TとSの間に見られる調和的なやりとりもまた、メタレベルに存在する超越者、すなわち作者によるコントロールの結果であると言える。

I群で見たデータは、概して説明的なテキストであった。II群においても、TはSに対して説明を行っているように見えるのだが、テキスト全体として見ると、説明的というよりは説得的、つまり積極的に何らかの主張を読者に伝えようとする傾向が強いように思われる。作者はその主張を読者に納得させるという目的に沿って、テキスト内の登場人物たちのセリフを決定する。それが結果的には、微視的レベルの話し手にサクラ然とした振る舞いを命じることになるのである。

このようなやりとりが展開していく中で重要になってくるのは、それを通して描かれるSの変化ないし成長の過程である。次に引用するData4は化粧品の広告のテキストであり、艶子(T)が潤子(S)にエイジングケア用商品について教える二者会話になっている。商品を説明するだけでなく、読者の購買意欲をそそるために商品のよさを宣伝するという目的を持つテキストである。

[Data4]

5 潤子 でも、エイジングケアって手間もお金もかかりそうだし～。

- 6 艶子 そうくると思ったわ。でも「アテニア スキンケアシリーズ」は、簡単にかっちりエイジングケアできて、しかもお手頃価格！
- 7 潤子 先輩、私も同期のコたちに負けない“キメ・ハリ・ツヤ”を取り戻したいッス！ オスッ!!
- 8 艶子 お、急にやる気が出たわね。決め手は攻めの“アクティブ保湿”よ！
- 9 潤子 外から水分を与えるだけの保湿とは違うんですか？
- 10 艶子 イエス！ “アクティブ保湿”は、独自の浸透テクノロジー「極小ナノ アクアカプセル」や、世界初配合の保湿成分「珊瑚草エキス」などによって、潤いを確実に届けながら肌の奥から保湿力をアップさせる、新時代の保湿なの。
- 11 潤子 だから、毎日の3ステップだけで、肌の内側から見た目年齢ケアまでばっちり？
- 12 艶子 その通り！ さらに、1万件以上のアンケート、約4000人のモニターの声から試作を繰り返してつくり上げた、敏感肌にもやさしい極上の使用感も大きな魅力ね。
- 13 潤子 心地よくお手入れできて、おまけに若々しい美肌になれるなんて夢みたいです。今日からアテニアで、エイジングケア・デビューです！

SはData4-5で、エイジングケアにはお金がかかりそうだという認識を示している。これは直後のTのセリフによって訂正される、(このテキストにおいては)誤った認識である。これが11になると、Tが説明していない内容までも先取りするほどの理解力を発揮しており、終結部の13に至ってはTの教えをすっかり我がものとして受け入れていることを示している。このようにSの商品に対する立場はごく短いやりとりの間に劇的な変化を遂げる一方で、Tの立場は一貫して変化していない。つまり、初めから商品の価値を信じ、推薦する態度を維持する。

換言すれば、次のようになる。商品に対するSの認識とTの認識は、最初是对立している。この対立は、SがTとのやりとりを通して認識を改め、Tの側に歩み寄っていくことで解消される。最終的にSとTは共通の認識に至る筋書きとなっており、この共通認識こそが、作者の意図する読者へのメッセージに相当する。

この群のデータにおけるSの認識の変化の大きさは、以下のようなセリフから明瞭に読み取れる。

[Data4]

5 潤子 でも、エイジングケアって手間もお金もかかりそうだし～。

↓

13 潤子 心地よくお手入れできて、おまけに若々しい美肌になれるなんて夢みたいです。
今日からアテナアで、エイジングケア・デビューです！

[Data5]

14 実帆子●学習した文型を使って依頼ができるようになることです。

↓

23 実帆子●文型が言えるようになること以外にも、いろいろ必要なんですね。

[Data7]

22 熊さん「思いますね。テロ、ピッキング、外国人犯罪、北朝鮮、BSE、SARS、
鳥インフルエンザ、それに少年犯罪の凶暴化。日本はどう考えてもヤバイ」

↓

46 熊さん「それも『外側の大きな力』ですね。宗教もイデオロギーも全体主義もある意味同じだ。

[Data9]

3 男「うん…ナニ？ ナットって。」

↓

31 男「そして俺達みたいに若くて健康な人間がバリバリ献血することが大事だな。よ～し患者さんのためにガンバルぞ～」

このように、Ⅱ群のテキストでは、まず「知る者」と「知らざる者」の仮設的対立を提示し、それが解消されるストーリーを持つという特徴がある。Sが最初に抱いている「誤った」認識は言わばTの主張を検証するための帰無仮説であり、これが予定調和的やりとりの中で首尾よく棄却されることで、SもTも同じ結論、すなわち作者の主張へと収斂していく様子がドラマ的に描かれるのである。

ステレオタイプ的人間関係

この群のテキストではI群に比べて活発なセリフのやりとりが行われ、感情的なリアクションなども見られることから、使われる言葉のバリエーションがより豊富なものとなっている。その結果、登場人物の持つ個性や背景がより鮮明にセリフに描出されやすくなっているように思われる。例えばData4の登場人物はT・Sともに女性であるが、先輩である「艶子」のセリフが比較的スタンダードな「女性語」であるのに対し、「潤子」の話すスタイルは敬語を織り交ぜつつも若々しく、くだけた印象を与えるものとなっている。

[Data4]

- 5 潤子 でも、エイジングケアって手間もお金もかかりそうだし〜。
- 6 艶子 そうくると思ったわ。でも「アテニア スキンケアシリーズ」は、簡単にかっちりエイジングケアできて、しかもお手頃価格！
- 7 潤子 先輩、私も同期のコたちに負けない“キメ・ハリ・ツヤ”を取り戻したいッス！ オスッ!!
- 8 艶子 お、急にやる気が出たわね。決め手は攻めの“アクティブ保湿”よ！

Data4-5ではいかにも若い女性らしい文末表現を用いて消極的な気分を表している。さらに7では、突然「体育会系の男子語」とでも言うべきスタイルに切り替えている様子が見られる。これは我々が日常の自然会話において、時に応じてキャラクタを切り替え、スタイルを変化させているという事実を再現しているものと思われる。このように、登場人物がその割り振られている基本的なキャラクタとは別のキャラクタをセリフの中で一時的に発動することで、人物の個性が生き生きと描出される場合がある。Data9-9でも、Sである「男」が、まさしく教師の発問に答える生徒を連想させるようなスタイルを一時的に用いている。

[Data9]

- 6 女「最後まで聞いてよ、ここからが大事なんだから！いままで血液のウイルス検査の方法は？」
- 7 男「確か…抗原や抗体検査だよな。」
- 8 女「ピンポ〜ン、やるじゃん！でそれを具体的に説明すると？」
- 9 男「と来ると思ったんだよな〜。分かりません！」

Data4における「体育会系の男子語」及びData9の「生徒語」はいずれも、会話の中でおどけて見せるSの人間性ととも、より上位にあるTに教を乞うという人間関係を強調しているようにも思われる。

SとTの「教える／教わる」という役割関係は、セリフだけではなく、人物や状況の設定とも密接に関連している。下表は、この群における登場人物の設定の概要である。

表 2

	学習内容	T	S
Data4	エイジングケア化粧品	艶子（先輩OL）	潤子（後輩OL）
Data5	日本語の授業方法	導夫先生（指導教員）	実帆子・習太（実習生）
Data7	現代日本の世相	ご隠居	熊さん
Data9	「NAT」	女（イラスト）	男（イラスト）

先輩と後輩、教員と学生、落語の世界におけるご隠居と熊さんとは、「教える／教わる」という関係がごく自然に成立する人間関係である。無論、現実には、後輩の方が物知りであったり、世間知らずのご隠居がいたりしてもおかしくはない。しかしながら、「エイジングケア」については後輩OLより先輩OLの方が、「世相」については熊さんよりご隠居の方が、それぞれ知識や経験、教養を持っていると、我々はイメージする。つまり、ステレオタイプの人間関係である。

ステレオタイプの言葉遣いである役割語が、登場人物のキャラクタを効率よく提示するように、ステレオタイプの人間関係を用いた人物設定は、登場人物が会話の中で果たす役割を手短に伝えることができる。セリフを中心に構成され、しかも長さにある程度の制限があるテキストでは、こうしたステレオタイプを利用することは非常に理に適っているとと言えるだろう。

Data9における「女」と「男」は、他の3例に比べればそれほどステレオタイプの印象は強くないかもしれない。しかしそのやりとりに注目すると、Tである「女」は理知的で真面目であり、一方のSである「男」は難しい話題から逃げようとしたり、「生徒語」のようにややおどけたスタイルを用いたりする様子が見て取れる。一般に学習漫画や初心者向けの入門書では、「どういうわけか、まじめな優等生の女子と、お調子者でバカな男子の

組み合わせ」(マツアリーノ 2007: 76) が登場するとされていることから、このような男女のキャラクタの組み合わせもまた、一種のステレオタイプの関係を形作っていると見ることができる。

このように、この群のテキストにおけるキャラクタ設定では、ステレオタイプの人間関係を利用し、人物や状況説明のための負荷を軽減させていると考えられる。従って各キャラクタは、TやSといったそれぞれの役割とある程度必然性を持って結びつくことが多い。つまり、知識・情報量の相対的な優劣が予めキャラクタ設定に組み込まれているために、優位にある方がT、劣位にある方がSを担当することを運命づけられ、互いに入れ替わることはない。この点は、I群におけるQやAのキャラクタ設定とは大きく異なっている。

ただし両者のキャラクタの違いは、基本的に、知識・情報量の差のみに集約されるものであるということには注意が必要である。というのも、TとSの対立関係は、既に見たとおり、最終的には解消されなければならない。言い換えれば、Sは知識・情報を獲得することで、Tに近づくことができなければならない。従ってそれ以外の対立、例えば正解のない価値観の違いや、テーマに対するスタンスの違いなど、知識・情報の獲得だけでは乗り越えられないような対立は、この群におけるキャラクタの描写からは捨象される傾向があるようである¹⁷。

3.3.3 III群：その他のタイプのテキスト

ここで見ていくのは、登場人物の役割関係がQ/A型、T/S型のいずれにも属さないタイプのテキストであって、現段階では必ずしも一つのカテゴリーとして名づけるほどの一貫性は見られない。Q/A型やT/S型の発展形のようなものもあれば¹⁸、まったく異なる性質のものもある。しかし共通して言えるのは、ここに含めたデータにおける登場人物は、「知る者」と「知らざる者」という単純な二項対立には還元しえない多様な対立関係を持ち、その結果、会話における情報の流れが固定化していないということである。

以下に引用する Data6 は、夏目漱石の俳句「三条の上で逢ひけり ^{おぼろづき} 朧月」について話し合

¹⁷ この問題については、Data5,9における男女のキャラクタの書き分けを、III群の Data14におけるそれと比較するとわかりやすい。

¹⁸ Data14は質問と回答が多く現れる点でI群に似ている部分がある。また Data13について、一方の人物がもう一人を説得しようとし、それが一応の成功を見たところで終わっている点では、II群に近いストーリーを持つと見ることができよう。

う「漱石」と「子規」、そして「稔典」の三者会話という設定がとられている。

[Data6]

- 1 漱石 前回、月並みが話題になったが、この句はどうだい？ 私はね、大いなる月並みは名句である、という説を掲げたいねえ。この句は句稿二十九（五月ごろ）に出ているよ。
- 2 子規 いや。名句は次第に月並みになる。月並みが名句であるのではないよ。たとえば芭蕉の、
古池や蛙飛び込む水の音
は、出来たときはとても新鮮だった。
- 3 稔典 歌ばかり歌っていた蛙が、急に飛ぶ蛙になったのですからね。
(中略)
- 11 漱石 おやっ、東京弁を使ったね。たしかに、三条大橋の上で、しかも朧月の下で逢うというのは、あまりにも絵のような逢い引きだねえ。でも、時々、このような月並みにどっぷり浸りたくなる。それが人間のおもしろいところだね。根が俗なんだ、我々は。
- 12 子規 うん。僕だって、会席料理が食べたいし、小遣いも欲しい。根が通俗という説にはおおいに同感だ。だから、月並みに意識的に向き合いたいんだよ、僕は。ともあれ、発想や表現が陳腐で典型的なもの。それが月並みだよ。

「漱石」は作品を気に入っているが、「子規」はあまり評価していない。この対立は「月並み」に対する二人のとらえかたの違いから生じているのだが、両者はこの問題について最後まで合意に至らない。「我々は根が通俗だ」という意見については一致するが、「漱石」はそれゆえに「月並みにどっぷり浸りたくなる」と言い、「子規」は「だから、月並みに意識的に向き合いたい」と言う。この対立はⅡ群のように解消されることを前提とした仮設的なものではなく、俳句観の相違という解消しがたい、またおそらく解消する必要もない対立である。さらにもう一人の登場人物、「稔典」の役割に注目したい。Q/A型やT/S型では、登場人物が三人の場合でも1対2の二項対立に帰せられていた¹⁹のに対し、「稔典」は「漱石」・「子規」いずれにも与することなく、補足や合いの手を入れながら中立的立場を保っている。

¹⁹ Data10と11ではQ:A=2:1、Data5ではT:S=1:2という配分になっている。いずれも「知らざる者」の方に多くの人数が割かれていることは興味深い事実である。

また登場人物たちの持つ知識・情報の差も、Ⅱ群のように量的な違いだけではない。俳句の大家である「子規」は句作法について、当該作品の生みの親である「漱石」はその背景や心情について、後世の研究者である「稔典」は文学史上の諸情報についてそれぞれ他の二人より詳しい。言わば三者の持つ知識は質的に異なるものであり、彼らは互いに情報を補い合いながら、かつそれぞれの立場を維持してやりとりを展開しているのである。従って終結部のセリフ（Data6-12）も、「子規」の主張のまとめではあるけれども、他の二人との間に成立した共通認識とは言えない。Ⅱ群におけるSのように相手の教えを受け入れたことを認める発言ではなく、自らの元来の持論を繰り返しているに過ぎないからである。

このように、登場人物が完全な合意に至らず、従って特定の視点に収斂していかないことが、Ⅲ群のテキストの大きな特徴である。登場人物は各々が会話参加者（P₁、P₂、…）として対等の立場にあり、ある面では意見が一致しても、他の面では相変わらず対立が残っている。その意味では、この群のテキストにおける登場人物たちは、最も現実の会話に近いコミュニケーションをとっていると言えるかもしれない。

もう一つ、この群で見られるセリフのやりとりの特色としては、テーマについての情報交換という観点からするとあまり意味のない発言、脱線した無駄話が多いということが挙げられる。先に引用した Data6 の中略部分には、次のようなやりとりが収められている。

[Data6]

- 5 漱石 うん。今の解説はさすがに^き冴えている。月並みという言葉に平凡という意味を与えたのは子規君だが、でも、何が月並みかは実際は判別がむづかしいね。
- 6 稔典 「吾輩は猫である」に月並みを話題にする場面がありますね。苦沙弥先生の奥さんが、家に来る皆さんはよく月並み、月並みと言うが、それはどのようなものかと美学者の迷亭に尋ねる場面です。奥さんは「何でも自分の嫌いなことを月並みと云うんでしょ」と辛辣です。
- 7 漱石 迷亭の答えは、「この日や天気晴朗とくると必ず一瓢を携えて墨堤に遊ぶ連中を云うんです」だったね。
- 8 稔典 ええ、そして、「中学校の生徒に白木屋の番頭を加えて二で割ると立派な月並が出来上ります」。
- 9 漱石 うん、うん。「馬琴の胴へメジヨオ・ペンデニスの首をつけて一、二年歐洲の空気で包んで置く」と月並みができる。

- 10 子規 だんだん分からなくなるじゃないか。迷亭の解説はともかく、君の今回の句は、三条の橋、朧月の取り合わせが月並みだ。いかにも京都、つまり、通俗的で平凡な京都の情緒を作っている、その取り合わせは。この句の月並みの判別はむつかしくないよ。明瞭に月並みさ。

Data6-10で「子規」が所謂“ツッコミ”を入れたように、『吾輩は猫である』の一節の引用は、「月並み」を理解するために必要とも、適切とも言いがたい。しかし「漱石」と「稔典」は、いかに月並みを判別するかを真剣に検討しようとして、このやりとりをしているわけではない。共通知識であるエピソードを互いに引き出し、確かめ合って遊んでいるのである。

次の例は、OLの旅行に対する意識についてのアンケート結果を「リエ」が「タケシ」に報告する場面を描いている。ここでも、やりとりの合間に皮肉っぽい冗談を織り交ぜている様子が観察される。

[Data14]

- 31 タケシ「海外旅行へはかなりの人が行っているの？」
32 リエ「ほぼ8割の人が海外旅行を経験してますね」
33 タケシ「行ったことがない人の理由はなんだろう」
34 リエ「お金がない、休みがとれない…というところですね」
35 タケシ「借金をして、無理矢理休みをとって行く人もいるけどね」
36 リエ「え、誰のことですか？」

我々の日常会話においては、何らかの情報を伝えようとする場合にも、本題から逸れてちょっとしたおしゃべりを交わすことで参加者相互の関係維持やその確認が行うことがあり、そうした言語の機能は交感的あるいは交話的機能などと呼ばれている（林 2008）。上に挙げたような他愛ない戯れのやりとりも、微視的レベルの話し手による交話的な言語使用と見なすことができるだろう。このようなセリフは、質問と回答以外の要素がほとんどないⅠ群や、合目的的にセリフが組み合わされているⅡ群のテキストでは現れにくいと考えられ、この群のテキストに特徴的な要素であると言えそうである。

解消されない対立

Ⅱ群のデータにおける登場人物の対立は、Sの知識・情報獲得によって解消されるものであり、価値観やスタンスの相違はあまり描かれないという傾向が見られた。しかしⅢ群のテキストでは、所有する知識・情報の違い以外の対立点も捨象されることなくセリフに現れる。

以下は新聞の広告欄に掲載されたテキストの全文である。Ⅱ群で見た Data4 と同じく商品の宣伝を目的としている文章であるが、やりとりの展開はまったく異なる様相を呈している。

[Data13]

- 1 家来 つつしんで申し上げます。はだかの王様。
いま巷では、LG2 という乳酸菌が評判でございます。
健康番組でも何度か取り上げられており、現代社会に貢献する新しい高付加価値ヨーグルトとして・・・
- 2 王様 わしも、国づくりに貢献しておるぞ！
- 3 家来 LG21 乳酸菌は、人類の健康に貢献しており各国からも注目が。
- 4 王様 わしも、各国を訪問すると注目されるぞ！ なにせ、はだかじゃからな。
- 5 家来 それはそれとして、王様。この LG21 乳酸菌は、なにかと大変な世代の中老年、特に、40 歳以上を中心に支持率が高くなっております。夫にたべさせたくて奥様が買われるケースも多いそうです。
- 6 王様 わしも、40 代じゃ。いろいろ大変じゃ。激務じゃ。
- 7 家来 ことの始まりは、明治乳業という会社が「プロバイオティクス」という分野の研究技術を使って、
自然界に無数に存在する乳酸菌のなかから見つけたそうです。
- 8 王様 難しい話はよい。ちょっと行って、買ってこい！

「家来」が「王様」に商品のよさを説明しているところから、両者の間に商品についての知識の差があることが推測されるが、より決定的な違いは、商品に対する両者の姿勢にある。「家来」のセリフは、ひたすら乳酸菌の健康効果や注目度を謳うことに終始する。これはそのまま、作者が読者に伝えようとする情報と見られ、もしも「王様」がこの情報に

耳を傾け、商品に対して抱いていた疑いを捨てて最後の「買ってこい」という指示に及んだのであれば、まさしく一つの結論へ収斂するT/S型テキストの典型を示すことになったはずである。しかしながら上のテキストでは、「王様」は「家来」の言葉尻をとらえては頓珍漢な受け答えをするばかりで、「家来」の報告する情報の主旨に対してはまったく反応を示さない。最後に至って唐突に商品への関心を示すものの、「家来」が懸命に伝えようとしている様々な情報を「難しい話はよい」と一蹴してしまう。Data4で先輩から教えを受けた後輩が、化粧品のよさを十分過ぎるほどに理解して購入を宣言したのとは対照的である。

次に引用するData14における会話には、基本的には「タケシ」の質問に「リエ」が答えるというやりとりが多く出現するが、「タケシ」が質問以外の感想を述べたり、「リエ」が尋ねられていない項目について進んで報告したりといった場面も見られ、単純なQ/A型テキストとは一線を画している。さらにData14-29及び30では、テーマとなっているアンケート結果の報告から一時的に脱線し、男女の価値観の違いについて対立的なやりとりが行われている。

[Data14]

- 27 タケシ「旅行先を選ぶポイントはあるの？」
- 28 リエ「道内なら温泉があることが最大のポイントでしょう、やっぱり。国内だと食べ物と値段が同率トップ、次が話題のスポットですね。海外になると値段が手頃であることがトップになってますね。次がショッピング」
- 29 タケシ「女の人って、どうして旅行に行ってまでショッピングなわけ？わからんな～」
- 30 リエ「海外だと日本よりず～っと安く買えるものがあるんですよ。買わずにはいられないじゃないですか！」
- 31 タケシ「海外旅行へはかなりの人が行っているの？」

このテキストには登場人物のプロフィールが掲載されており、「タケシ」は「海外旅行の際は入念な下調べをし、現地の地理はもちろん、簡単な日常会話も頭に入れてから旅立つしっかり者の25歳」とされている。とすれば、Data14-29の彼のセリフは、海外での買い物のメリットについて無知であるがゆえの質問ではありえない。このわずか1ターンの脱線に垣間見える価値観の対立は、登場人物に設定した性別（あるいは、それにまつわる社

会的なイメージ) に付随して生じているのである。

次の Data12 における登場人物「田中」と「太田」はいずれも実在の漫才師をモデルとしている²⁰。世の中で起こった事件を真面目に説明しようとする「田中」とふざけて茶々を入れる「太田」は、テーマに対する姿勢こそ対照的であるが、知識・情報量の差は明確ではない。事件に関する情報を語るのは主として「田中」だが、「太田」もその情報については既に知った上で“ボケ”ているようであり、また「太田」が提供した情報を「田中」が知らなかったかのようなリアクションを取る場面 (Data12-29,31) も見られる。

[Data12]

- 28 太田——でも、話によると、監禁されたなかで、テレビだけは許されていてよく観ていたって話だけだな。
- 29 田中——そうなんだ。
- 30 太田——だから、おそらく彼女にとっては、テレビだけが唯一の社会と自由につながる接点だったんだろうな。
- 31 田中——そうだよな、どんな番組を観てたんだろうな。
- 32 太田——『電波少年』の“なすび”に夢中だったらしいよ。
- 33 田中——結局監禁されてんじゃねえかよ！ 何が自由との接点だよ！
- 34 太田——監禁されてる人間にとっては“なすび”はヒーローなんだろうな。
- 35 田中——そんなワケねえだろ！

以上のように、この群のデータには、登場人物の知識や情報量の差ばかりではなく、性別や性格、価値観、テーマへのスタンス等に基づく対立を観察することができる。すなわち、設定されたキャラクタに由来する、解消されることを前提としない対立である。

巨視的コミュニケーションの観点で見れば、このような解消されない対立をテキストに仕掛けることにより、異なる意見や立場を並列的に提示することが可能になると言えるだろう。例えば、ヨーグルトをその健康効果ゆえに薦める立場と、理屈はともかく食べてみたいと訴える立場の双方から、読者に対してコミュニケーションを図ることができる、

²⁰ ただし、出典書籍巻末の「解説」にも明記されているように、この文章は太田光が一人で書いたものであるらしい (松尾 2007)。テキストは現実の漫才の書き起こしではなく、あくまで架空の会話である。従って登場人物も、二人をモデルにした架空の人物と見なすべきであろう。

といった具合にである。

交話的やりとりと“アソビ”

交話的な言語使用は、「せまい意味での『情報』のやりとりには役だっていないが、円滑な人間関係の構築と言う目的を私たちが達成する上で大きな意義を持っている」（定延2005）という。しかし微視的レベルにおける登場人物の人間関係は、巨視的レベルにいる作者のコントロール下にあり、円滑な関係を構築するための努力は本来的には不要であるはずである。それではこの群において、交話的なやりとりに多く筆が割かれているのはなぜか。そこには、現実の会話らしさを醸し出すという演出だけではない、巨視的コミュニケーションに関わる何らかの要請が働いているのではないだろうか。

Data6-6 から 9 にかけての「月並み」についての脱線話は、少なくとも主題となっている俳句作品や「月並み」について読者に理解させるために適切な情報とは言いがたい。見ようによっては小説『吾輩は猫である』への興味を喚起しようとしているようでもあるが、それにしても情報が少なすぎ、単に「漱石」と「稔典」が調子に乗って楽しんでいる様子を描写しているだけのようにも見える。また Data14 で、登場人物の一人が「借金をして、無理矢理休みをとって」旅行に行くようなキャラクタであることへの言及は、小説やドラマならばともかくアンケート結果報告という文脈においては、読者にとってさほど重要な情報ではない。巨視的レベルにおける情報伝達という観点からすれば、これらのやりとりは実質的な意味の乏しい“アソビ”である。

しかしこうした“アソビ”は、各登場人物のキャラクタが最も強く表出する部分でもある。Data14 における“アソビ”と見られる部分を見ていくと、話し手たちの個性や関係性を読み取ることができる。

[Data14]

- 1 タケシ「いや～、日常を離れた旅行はリフレッシュに最適だね！なんか、こう、仕事に対するやる気が前以上に湧いてきた感じ」
- 2 リエ「信じられな～い！この忙しい時期に有給取ってイタリアへ行ってきたなんて！」
- 3 タケシ「いいだろ、年に一度のことなんだから」
- 4 リエ「ま、いっか。私も台湾旅行で休んだし…。

（中略）

- 21 タケシ「へ～、なんか、また旅に出たくなってきたなあ」
- 22 リエ「いい加減にしてください！」
- (中略)
- 23 タケシ「リエの旅行目的って何？」
- 24 リエ「そりゃあ、美味しいもの食べて飲んでリラックスして…」
- 25 タケシ「それって、普段の生活とおんなじじゃん」
- 26 リエ「言われてみれば…。」
- (中略)
- 29 タケシ「女の人って、どうして旅行に行つてまでショッピングなわけ？わからんな～」
- リエ「海外だと日本よりず～っと安く買えるものがあるんですよ。買わずにはいられないじゃないですか！」
- (中略)
- 35 タケシ「借金をして、無理矢理休みをとって行く人もいるけどね」
- 36 リエ「え、誰のことですか？」
- (中略)
- 39 タケシ「いいね、オレも行ってみたいな、そういうとこ」
- 40 リエ「いつか行きたい場所のトップはイタリアですよ」
- 41 タケシ「いいトコですよ、みなさ～ん。で、リエは今度はどこへ行く予定なの？」
- 42 リエ「今度っていうか、新婚旅行は世界1周する予定で～す」
- 43 タケシ「それまで『世界』が待っていてくれればいいけどね」

無論、ここに引用した部分が、まったく情報伝達に寄与していないというわけではない。しかし、下線を付した Data14-40 に比べ、その他の部分が読者に対するアンケート結果についての情報提供という目的から外れていることは明らかである。しかしながら、これらの“アソビ”部分には二人の登場人物の個性や軽口を叩き合う気楽な関係が明確に表れている。かつ、こうした掛け合いの生み出すユーモア、おかしみは、無味乾燥なグラフや数値の羅列ばかりになることを避け、テキスト全体にエンターテイメント性を付与している。

そもそも Data14 はフリーペーパーの連載記事の一つであり、アンケートの報告がテキストの主題とは言え、究極的には、読者を楽しませることに重点がある。とすれば、登場人物による個性的な発言、小気味のよい掛け合いを提示することも、作者から読者への重要

な働きかけの一つと見るべきである。

こうしたエンターテインメント性は、「紙上漫才」と銘打たれた Data12 ではさらに顕著である。

[Data12]

- 1 田中——京都の小学生殺人事件と、新潟の少女拉致監禁事件。ここんところ、立て続けに大きな話題が続いているよね。
- 2 太田——岡村君と佐藤君。
- 3 田中——お笑いコンビじゃねえんだよ！
- 4 太田——最近どっちがどっちの事件だったか、わからなくなるんだよな。警察がミスしたのはどっちだっけ？
- 5 田中——どっちもだよ！ 皮肉な言い方するなよ！
- 6 太田——ああそうか、警察が現場で取り逃がしたのが京都で、現場に行かなかったのが新潟か。
- 7 田中——わざわざそんな覚え方しなくていいんだよ！ しかし、どっちにしろホント、警察のミスが目立つよね。京都の事件なんか、捜査員十九人で行ったんだよね。でも結局、逮捕令状を持ってなくて、犯人の岡村が「公園でなら話してもいい」って言って、みんな公園に行ったんだよな。
- 8 太田——“公園デビュー”ってやつだな。
- 9 田中——違うよ！ それで、公演で話してるうちに逃げられちゃった。捜査員十九人もいたんだぜ、いったい何をやってたんだろうな。
- 10 太田——七人がすべり台で滑ってて、六人がジャングルジムに登ってて、二人がブランコに乗ってて、四人は後ろで順番待ちしてたって。
- 11 田中——バカか！

事件についての情報の伝達をこの文章の第一義とするなら、「太田」のセリフは大半が無駄である。読者が事件の情報を知りたいなら、「田中」のセリフだけを読むだけでほとんど事足りるだろう。しかしながらこの文章の醍醐味は言うまでもなく、「太田」の風刺の効いた“ボケ”とそれに対する田中の“ツッコミ”を楽しむことにある。「田中」の説明部分はむしろ、“ボケ”を引き出すための“フリ”に過ぎない。

漫才ほどエンターテイメントに特化するものは稀だとしても、微視的レベルの登場人物たちの軽妙な掛け合いによって読者を楽しませることは、それだけで巨視的コミュニケーションの目的となりうる。書籍や雑誌記事は、知識を得るためばかりに読まれるわけではなく、娯楽として消費されるものでもあるからである。商品を宣伝する広告もまた、商品価値を伝達することにだけ意味があるのではない。テレビのコマーシャル・フィルムにおいて時にまったく商品説明を省いたものが見られるように、たとえ何一つ具体的な価値が伝わらなくとも、広告が好印象を与えるというだけで商品の知名度は上がり、宣伝効果をもたらす結果につながるからである。

キャラクターの自律と作者の背景化

この群のテキストに登場する人物たちに関して特徴的と言えるのは、他の群に比べ、キャラクター設定が詳細もしくは具体的であるという点である。4本のデータのうち、Data6とData12では実在の人物を、Data13は有名な童話の登場人物をモデルとしている。またData14では登場人物についての詳細なプロフィールが併記されている。

表 3

	P ₁	P ₂	P ₃	備考
Data6	漱石	子規	稔典	すべて実在の人物
Data12	田中	太田	—	いずれも実在の人物
Data13	はだかの王様	家来	—	アンデルセン童話の登場人物から
Data14	タケシ	リエ	—	詳細プロフィールあり※

※Data14の登場人物プロフィール

「タケシ」

乙女座、A型。海外旅行の際は入念な下調べをし、現地の地理はもちろん、簡単な日常会話も頭に入れてから旅立つしっかり者の25歳

「リエ」

射手座、B型。お手軽な海外旅行へは誘われるとついつい行ってしまい、豪遊(?)のツケにあとから苦勞してしまううっかり者の23歳

I群、II群の分析で、登場人物はすべて作者の分身であり、そのセリフは作者のコント

ロール下であり、ゆえに登場人物たちは調和的にやりとりを展開する、ということが明らかとなった。Ⅲ群においてもその根本原理は変わらないが、ここに挙げたような具体的な人物像は、作者によるセリフの統制にいくらかの制限を与えるように思われる。

例えば、Data6において俳句を紹介するとき、作者がその句を高く評価しているのであれば、「漱石」や「子規」にその句のよいところを述べさせ、全員で誉め上げるようなやりとりを形成することも可能である。あるいはⅡ群のように、最初は意見を対立させつつ、最終的には一致した結論に至るような展開を選択することもできる。しかしながら実際には、その句に対して実在の漱石や子規が言いそうなことをセリフにせざるを得ないであろう。作者があとがきで「漱石や子規がしゃべっていることがらは、言うまでもなく私の意見だが、彼らも実際にこのようにしゃべるに違いない、という確信に近い思いが私にはある」（坪内 2003: 216）と述べているように、セリフは漱石・子規の研究を続けてきた作者の心内に出来上がった「漱石キャラ」「子規キャラ」に沿うように書かれている。裏を返せば、いかに自分の意見と言えど、「漱石キャラ」「子規キャラ」に合わないことを彼らのセリフとして書くことは憚られ、「稔典」すなわち自分をモデルとした第三の登場人物に語らせなければならないのである。

モデルの特定されていない、おそらくはオリジナルの登場人物を用いた Data14 においても、上記のような具体的なプロフィールを掲げている以上、それぞれのキャラクタを尊重したセリフ内容や言い回しが要求されるのは当然である。しっかり者の男性である「タケシ」とうっかり者の女性である「リエ」は、それぞれの視点から同じアンケート結果に対し、異なる見解を示す。従って二人の会話は、アンケート結果を報告する者（知る者）と報告を受ける者（知らざる者）という対立だけではなく、男性と女性、しっかり者とうっかり者といった対立も必然的に内包することになる。情報量の差は報告が進むに従って縮まっていくとしても、性別や性格による対立は容易には解消されない。

最初の人物設定は作者が任意に行ったものだとしても、一度キャラクタが決まってしまうえば、その振る舞いかたは方向づけられる。作者の統制に依存することなく、各人物がある程度の自律性を持って言葉を発するようになる。その結果、必ずしも作者の思惑通りに談話が進まなくなる、所謂“登場人物が独り歩きする²¹”可能性が生ずる。が、それは忌避

²¹ 戯曲や小説などの創作においては、登場人物が“独り歩き”することによって物語が作者の意図しなかった方向へ進んでいくことを、むしろ歓迎する風潮もある。それは所謂“キャラが立っている”証拠であり、(俗語としての)「予定調和」を免れることにつながるか

されるべきこととは限らない。登場人物たちの掛け合いを楽しませることが巨視的コミュニケーションの目的の一つになりうるのだとすれば、彼らが生き生きと個性的なセリフを交わすこと自体が合目的的となりうるからである。

ところで、登場人物が自律的であり、それぞれのセリフ内容がキャラクタに応じて決まってくるのだとすれば、各発言の責任が帰せられるのは作者ではなく、発言した登場人物自身ということになる。なぜなら、それらのセリフは一応作者によって言語化されたものだとしても、作者の意見が反映されているとは限らないからである。

[Data14]

- 7 タケシ「ちなみに人気の場所は？」
- 8 リエ「道内のトップは函館、国内は東京・横浜のテーマパークがダントツ、海外はかなりばらつきがあって、上位はハワイ、韓国、グアムとなっております。先輩が行ってきたイタリアはランクインしてませんが」
- 9 タケシ「え、そうなの？いいトコでしたよ、みなさ～ん」

ここで「みなさ～ん」（読者、あるいはアンケート回答者）にイタリアのよさを保証するのは、イタリア旅行から帰ってきたばかりであるという設定を持つ登場人物「タケシ」の責任においてである。作者は「タケシ」という人物がこのようなアンケート結果を知ったら言うであろう言葉を文字に表しただけであって、その内容まで責任を負う必要はない。セリフとは、少なくとも名目上、各キャラクタが言いそうな内容を書き起こしたものに過ぎず、それについて作者がどう考えているかは、地の文のない会話形式では明示する余地がない。

このようにして具体的なキャラクタ設定は、自律的な登場人物の陰へ、作者の意思を追いやってしまう。作者と読者の間のコミュニケーションも、表立っては意識されにくくなる。読者の立場は本来、作者の言葉が直接的に向けられている対象（addressee）であるはずだが、登場人物の存在感が作者を上回ることで、微視的レベルの話し手たちの会話を傍聴する第三者（auditor）としての立場の方をより強く印象づけられることになるだろう²²。

らである。

²² この二つの語は、Bell (1991) の用法に従っている。彼はマスコミュニケーションにおけるメッセージの受信者 (audience) を、メッセージのターゲットである受信者 (addressee)、

興味深いことに、Data14-9で「タケシ」が「みなさ～ん」と呼びかける対象は、「リエ」との会話が成立しているテキスト内の世界には存在しない。読者全般にしるアンケートの回答者であるにしる、現実の世界に実在する不特定多数の人々である。あたかも芝居の登場人物が舞台から観客に話しかけるように²³、「タケシ」はメタレベルとの境界線をあえて超えてみせる。それにより、彼が実は現実世界にいる傍聴者の存在を認めつつ、素知らぬふりをして微視的レベルにおける会話を行っていたのだという公然の秘密を逆説的に暴露するのである。

自律的な登場人物たちは、まさしくステージでライトを浴びる役者のように読者の前に顕現し、まるでシナリオなど存在しないかのように、会話のやりとりを演じてみせる。読者は、幕の陰に作者が隠れていることを知っていながらも、それとは意識せず、あくまで登場人物たちが互いに交わす言葉としてセリフを受け取ろうとする。このような傍聴者としての読者には、Ⅱ群のテキストに見られたような、作者の意図があからさまに感じ取れるような予定調和的ストーリーは、あまり歓迎されないかもしれない。

会話の「場」という仮想空間

各セリフの責任が話し手である登場人物に帰せられたとき、作者は言語主体としての役割を表面上は免れて、登場人物たちの発言を書き起こしテキストとして成立させる構成者としての役割を負う。とすれば、Ⅲ群のテキストは、架空の設定によるものでありながら、座談会記事のようなノンフィクションのスク립ションに近い性質を帯びることになるだろう。

ミヨシ（1996）は対談や座談会といった話し言葉のスク립ションの特質として、そこに述べられる言明が「受動的思索」によるものである点を挙げている。参加者たちが互いに示唆を循環させ、反応を返し合うことで進んでいくやりとりは、個人が孤独に思考を積み重ねて文章を組み立てていく著述とは異なり、集団が共有する空間における雰囲気の流れに左右される。言い換えれば、会話の「場」（高崎・立川 2008）における他者とのインタ

ターゲットではないが受信していることを予期されている者 (auditor)、受信していることを予期されない者 (overhearer)、受信していないと予期されている者 (eavesdropper) の四つに分類している。

²³ 演劇において役者が客席に語りかけたり、あるいはインタビューを受けている人がインタビューアではない聴衆に話しかけたりといった、二重構造の枠組みを一時的に破るようなパフォーマンスの存在は広く知られており、阪本（1991）や Bell（1991）でも言及されている。

ラクションがあるために、論拠や結論が不明瞭になり、厳密さを欠く言説になりやすい。ミヨシはこうした特質を持つスクリプションが社会的な言論において流行することを批判的にとらえているが、一方で、それらが専門の論文よりも読者にとって手に取りやすく、寛いだ関わりができるものであることを認めている。

既に述べたようにⅢ群のテキストには、情報伝達の上では重要性の低い“アソビ”部分が多く、そこでは話し手たちが互いの関係を確認め合うような戯れ、交話的なやりとりが見られる。交話的な言語使用はコミュニケーション相手との「接触」に関わっており（林2008）、話し手たちがそこに居合わせ触れ合う「場」の存在を強調するものでもあると言えよう。

自律的な登場人物たちにより作者が背景化される時、代わって前景に現れるのは、彼ら話し手たちがインタラククションを行うこの「場」である。とすれば、彼らの会話の傍聴者としての読者もまた、この「場」に居合わせているかのような感覚を持って然るべきであろう。無論この「場」とはテキスト内に存在する非現実的な時空であって、読者が文字通りそこへ赴くことができるわけではない。しかし現実に対面できない相手と仮想空間で交流し、触れ合いの感覚を持つのは今や特異な現象ではなく、通信技術の進歩が生み出した種々のネットワーク・サービスによって既に試みられていることでもある。

傍聴者としての読者は、登場人物たちのセリフに収められた情報を読み取るばかりではない。それらのセリフが交わされるような「場」の空気を、登場人物たちと共に味わうことを許されている。作者が過ぎ去った時間に完結させた「モノ」としてではなく、今まさに進行中の「コト」として登場人物たちのインタラククションを目撃する。そうした言わば擬似的なライブ感覚への可能性が、自律的な登場人物たちによって開かれていると考えられるのである。

3.4 考察

以上、3群それぞれについて、分析結果と考察を述べてきた。ここでは、全群を通して整理が必要と思われる点について取り上げ、関連分野の知見も交えつつ、補足的な考察を行うこととしたい。

3.4.1 文章の対話性

山口（1998）は「語り」が言語の使用にもたらす影響について考察する際、語りの言葉

を対話の言葉に対比させるというアプローチを採用している。なぜなら、「ことばが使用されるもっとも基本的なコンテキストは、対話である」（山口 1998: 13）からである。

歴史的経緯を振り返るまでもなく、「対話、すなわち言葉の交換は、言語のもっとも自然な形態である」（バフチン 1930=2002: 144）。対話（ダイアローグ）とは相互的な談話である。そこで生じる個々の発話は先行する別の発話への応答であり、また聞き手による応答を求める。「語り」の言葉である文章も、こうした対話の言葉の性質とまったく無関係ではありえない。いかなる形式の文章も、それが生まれる以前に発せられた諸々の言葉を前提とし、かつ読者による反応を想定した上で記述される。無論、作者が執筆時にそのことを明確に意識しているとは限らない。しかし、「説明」する文章が潜在的な「質問」への回答として初めて成立するといったように、たとえ具体性を欠いた不特定な対象であるにせよ、何ものかとの相互的なやりとりの中で生まれるものとして文章をとらえる必要がある。

そもそも、我々が文章を生み出すために行う思考そのものが、対話的な性質を帯びているということを認めなければならない²⁴。「われわれがなにかの問題に取り組み、それを注意深く考察しはじめるやいなや、われわれの内言（ときに、ひとりきりで、声に出されたものであることば）は、問い・答え・主張・その後の否定という形態をとる。つまり、われわれのことばは、大小さまざまな個々の応答に分かれており、対話的形態をとっているのである」（バフチン 1930=2002: 147）。このような内なる対話がスムーズに進むとき、我々は容易に考えをまとめ、言語に表現することができるだろう。そうした場合には、自己の内側で対話的な応酬がなされていることは意識されづらいかもしれない。しかし、なかなか対話がうまく進まない場合、自分の内側で相反する意見が平行線をたどって結論が出せないような場合には、このような潜在的な対話が意識の上に表面化することもある。例えば柳瀬（2007）は、「七」という漢数字の読みかたに対する自身の立場を決めかねている葛藤を、以下のようにいくらか戯画化しつつ表現している。

ぼく自身がシチときれいに発音できないだけに、シチに執着があるのでしょうか、シチを復活させたい気持があります。しかし一方では、たんに復古趣味と受け取られるかもしれないので、そうこだわるまでもないかとも思う。ぼく自身の内部で、シチ派とナナ派が

²⁴ 哲学的な思考を記述した書物が、対話の設定を好む傾向があることは周知のことであろう。古くは中国・春秋戦国時代の諸子百家、近年ではヨースタイン・ゴルデルの『ソフィーの世界』など、形式としては散文であっても、設定としては対話を中心としている哲学書・思想書は洋の東西を問わず見受けられる。

こんなやりとりを始めます。

シチ派 シチの消滅が、わずか四十年ほど前のことだとすれば、まだ復権の可能性はあると思うんだ。しかし多勢に無勢というか、とにかく七をナナと読む人が今では圧倒的に多い。ナナ派があまりにも大勢だから……。

ナナ派 その大勢だって湯桶読みじゃないか。大をオオと読む和調と勢をゼイと読む字音が半々だ。ナナカンだって、そういうものだと受け取れば抵抗することもないだろう？

シチ派 もちろん、ぼくは湯桶読みや重箱読みが天才たる日本語の懐の深さだというふうには思う。でも、なぜ、ナナでなくシチが本来の正しい読みかという、たとえば、こういう台詞があるよ。

(中略)

シチ派 なんだか、君の独壇場になってきたな。

ナナ派 その独壇場だって、独壇場の間違いじゃないか。「擅」を「壇」と読んだ間違いからできたのに、ほら、きみだって使ったろ。

シチ派 またうっかり言ってしまった。とにかくぼくは、長年日本語を使ってきて、それでもまだまだ日本語に^{たんのう}堪能でないとってる。だからシチとナナは気になるんだなあ……。

ナナ派 日本語に^{かんのう}堪能だろ？ (柳瀬 2007: 179-82)

また漫画などで時折見られる、主人公が財布を拾い、その背後で交番に届けようとする天使（良心）と横領してしまおうとする悪魔（欲望）が言い争いをするといった場面も、内なる対話が不調和により意識に上る様子をデフォルメした表現であると言えよう。もしもこのときの内なる対話が「この財布、どうする？」「交番に届けよう」「そうだね」といったように円滑に進むとしたなら、あえてその過程が彼／彼女の脳裏に意識されることはないかもしれない。しかしそのような場合でも、ただ意識の上に顕在化されないというだけであって、内なる対話が行われていないというわけではない。

とすれば、次のように言えるかもしれない。会話形式の文章の作者が、本来一つである自己の視点をわざわざ複数の視点に分裂させて表現しているわけではなく、一般の（例えば散文形式の）作者が、本来はいくつもに分かれている自己の視点をわざわざ一つに統合し、その一点からの「見え」に依ってテキストを構成しているのだと。

殊に、マスメディアを通じて発信される文章は、不特定多数の読者に向けて発信される

ものである。自分とはまったく異なる考え方を持つ人間がそれを読み、思いもよらない反論を抱くかもしれない。時間的空間的に読者と隔てられたコミュニケーションにおいてそれを回避するには、あらゆる視点からの反論を予め想定し、文章の中で先回りしておくしかない。このような文章を執筆する際の思考には、善悪のような単純な対立ではなく、より多様な視点からの見解が飛び交い、ぶつかり合うことだろう。一般的に文章の作者は、このような数多くの視点からの「見え」をまとめ、単一の視点からとらえ直して言語化する。「七はシチと読むべきだ」という意見を最終的に採るならばナナ派の反論をもその中に取り込んで否定しなければならず、もしも自分の中でシチ派とナナ派の決着がつかないとするなら、「まだ結論は出ていない」という中立の視点をもって両者を統括しなければならない。そうして統一的な視点に立って初めて、作者は一貫性のある文章を成立させることができるのである²⁵。

ところが、会話形式で表現する場合には、このような単一の視点による統合を必ずしも要しない。上に挙げた柳瀬の例では、セリフの前に導入部分があることで、どっちつかずの状態であるということが明示されているが、セリフ部分だけを見れば、シチ派とナナ派それぞれの視点からの意見を記述しているだけである。そこには、結局どちらが作者の結論なのか、あるいはどちらでもないのかといった最終的な立場を明言する余地はない²⁶。

無論、会話形式の文章で書き出されたセリフは、内なる対話で飛び交う言葉をそのまま文字化したものではありえない。作者の内側で対話し合う多数の視点は、そのテーマにおいて重要性を持つ少数の、通常は二つから三つ程度の視点に絞り込まれる。会話形式の文章における登場人物とは、こうした視点を担うべく生み出された作者の分身であり、それぞれが特定のキャラクターを与えられた上で、微視的コミュニケーションとして対話をし直すのである。従って会話形式の文章におけるセリフのやりとりは、作者の内なる対話をフィクションの出来事としてデフォルメし、再現したものと見なすべきであろう。

一般に文章は、思考の結果物として提示されるものである。対話の言葉と異なり、書き手は読み手の反応を想像して、文書の調子や文体、構造をまとめ上げる（ミヨシ 1996）。言うなれば、既に過ぎ去った時間の遺物である。会話形式という形をとっても、そのことに変わりはない。しかし、本来なら文章化される前に終わっているはずの対話が、登場人物

²⁵ 所謂「まとまりのつかない」文章は、分立する視点を首尾よく一つに統合できないまま言語化してしまった結果と見ることができるだろう。

²⁶ 明言はしなくとも、作者がとる立場を読者が推測可能なようにテキストを組み立てるということはよく行われる。II群で見たような説得的な文章は、まさにその好例と言えよう。

の口を借りて再現されることで、あたかも現在進行中の出来事であるかのような体を装うことができる。これにより読者は、登場人物たちがおしゃべりをする場に居合わせ、それを傍聴しているかのような気分でテキストに相對することを許される。巨視的レベルにおける一方的なコミュニケーションの受け手ではなく、自由参加している第三者という立場をとることによって、交わされる発言に対してより主体的に解釈を行いやすくなるかもしれない。1.3で紹介した実験において、会話形式の説明文を読んだ被験者が散文形式で読んだ被験者よりも多様性に富んだ自由な読みをする傾向が見られた要因の一つとして、このような読者のテキストに対する態度の違いを挙げることができよう。

3.4.2 登場人物とキャラクタ

作者の内なる対話をデフォルメした上で再現する際には、それを演じる話し手役が不可欠となる。そこで作者は自らの分身に個別の他者モデルすなわちキャラクタを適用し、フィクションの世界における個々人として送り出す。キャラクタは、「老人キャラ」や「お嬢様キャラ」のようなステレオタイプのものもあれば、実在の人物をモデルにした詳細で具体的な人物像もあり、一方では性別も年代も特定しづらい没個性的なものまで様々である。が、大抵は一人の登場人物につき一つのキャラクタが固定的に割り当てられる。

登場人物に話し手の役を譲ることで、本来の言語主体である作者は、あたかも彼らが互いに交わす発話をそのまま書き起こしているかのように装う。このとき、テキストに現れるセリフは、直接話法の引用句とよく似た性質を持つことになるだろう。すなわち、個々のセリフの内容や表現に関する責任は、それを引用し再構成した者ではなく、その話し手とされる登場人物に帰せられる²⁷。従って会話形式の文章では、読者の立場が巨視的コミュニケーションの当事者から微視的コミュニケーションの傍聴者へと移行するだけでなく、作者もまた、引用者ないし構成者という立場に位置づけられる。言わば作者は、自ら言語主体としての責任と権威を放棄する。

もっともこれは、あくまで見せかけである。確かに登場人物たちは、微視的レベルで見

²⁷「引用者は、直接引用句を自分の手で再構成した上で提示しているにもかかわらず、その内容や表現に関しては責任を事実上、放棄しているのである。引用者が責任を負うのは、原発話が『誠実に』再現されているかという点についてである。(……)しかし、原発話に結果として若干の改変が生じたとしても、引用の仕方自体が誠実であると認められるのなら、直接引用によって伝えられる表現や内容に対する責任は引用者にはない、と考えてよいであろう。」(山口 1998: 62-3)

れば、個々の意思に従ってコミュニケーションを行っていることになっている。だが巨視的レベルで見ると、どのセリフもすべて作者によって生み出されたものであるから、その背景には同一の知識が存在している。にも関わらず知識の差を思わせるような発言がなされるのは、黒幕である作者がそう言わせているからに過ぎない。Ⅰ群のデータにおける極度にスムーズな問答や、Ⅱ群における予定調和的なやりとりは、このようなメタレベルからのコントロールのもとに成立している。

また作者は、各登場人物に任意のキャラクタを割り振ることによっても、会話の展開を操作することができる。キャラクタにはそれぞれ特徴的なしゃべりかた、発話行為、思考パターン、他のキャラクタとの人間関係が付随するからである。例えばⅡ群のようなテキストにおいて、T・Sの対立とその解消のストーリーをそう多くはない字数の中で完結させるために、「教える／教わる」という関係が自然に発生するようなキャラクタを設定するという選択がなされる。少しお節介な先輩とお調子者の後輩、物知りなご隠居と無学な熊さんといったステレオタイプ的な人間関係を利用して、人物や状況設定に関して読者に説明する手間を省くのである。

しかしキャラクタは、常に効率的な情報伝達に寄与するというわけではない。登場人物にどのようなキャラクタを設定するかは作者の裁量で決められるとしても、一度決めてしまえば、登場人物の発言はそのキャラクタにある程度規定されるようになる。特に、漱石や子規や実在の漫才師といった具体的な人物をモデルとしている、あるいはプロフィールを仔細に定められているような登場人物には、会話の各場面においてそのキャラクタの言いそうなことを言わせなければならない。そのようなセリフには、情報の伝達上あまり重要性のない、交話的な言語使用も生じてくる。無論それも作者の手による創作であるには違いないのだが、ひとたび登場人物が自律的に振る舞い始めれば、必ずしも作者の進めたいとおりにやりとりを進ませることができないという事態も起こりうる。

従って、あまり個性的なキャラクタを登場人物に設定することは、情報伝達の効率性という観点からすればマイナスに働く危険性もある。Ⅰ群のように説明事項の羅列を本旨とするようなテキストにおいて、キャラクタが没個性的であったり、個性が登場人物の担う役割に活かされていないかたたりすることには、こうしたキャラクタの自律によるリスクを回避する意義があると言えるかもしれない。適切な質問とそれに対する回答をテンポよくこなしていくには、先行する発話へのリアクションや軽口の叩き合い等は不必要な“アソビ”に過ぎないのである。

3.4.3 文章による交話的コミュニケーションの可能性

登場人物同士が一見無駄話のようなやりとりをしているとしても、そこには作者が読者に対して何かを伝えようとする意図が働いているはずだと、我々は考えがちである。例えば Data6-6 以降において、「月並み」とは何かという問題に関して『吾輩は猫である』の一節が引き合いに出されている場面は、微視的レベルにおける情報伝達としては「子規」の言うとおりの「だんだん分からなくなる」、つまりあまり有意義ではないやりとりかもしれない。が、作者はこの脱線にかこつけて、漱石の代表作である小説にそのような滑稽な一節があるという情報を読者に伝達することもできる。あるいは作者の抱いている「漱石キャラ」を強調する意図があるかもしれないし、何かもっと別のメッセージを伝えようとしているのかもしれない。

しかし、Ⅲ群に見られる“アソビ”部分は、作者から読者への情報伝達という見地からしても、その必要性が不明な場合がある。Data13における「はだかの王様」の頓珍漢な受け答えから、我々はこの人物が国づくりに貢献していて各国から注目されている（と自分で思っている）40代であることを知ることができるが、作者にとってその情報を読者に伝達することにはいかにどの意義があるのか、疑わしい。むしろ、ヨーグルトの宣伝であるという用途からすれば、限られた紙面の中でこのような情報に筆を割くことは無駄以外の何物でもないように思える。

この問題について考えるには、既に述べたとおり、文章を通したコミュニケーションにも情報を伝達すること以外の側面があるということを確認する必要がある。メイナード（2004）は書き言葉のジャンルの一つに感情的なアピール効果を主目的とするものがあると述べ、文学的なテキストをその例として挙げている。しかし、たとえそれ以外の目的で書かれた文章であっても、おかしみを醸し出すような要素が部分的に組み込まれていることは珍しくなく、それらも読者との間のコミュニケーションの上で大きな意義を持っていることを見逃してはならない。読者の心を動かし、引きつけるための言語使用は、あらゆる形式、あらゆるジャンルの文章に、多かれ少なかれ含まれているはずである。

読者の注意を引くための方略だけでは限らない。“アソビ”部分には、非言語的な要素が関与している可能性もある。ここで言う非言語的要素とは、セリフから読み取れるものの明示的には言語化されていない要素、例えば登場人物たちの相互行為によって生まれる楽しい雰囲気といったものが挙げられる。そうした要素は読者に対し、会話の「場」のイ

メージを強く喚起する。作者との間の巨視的コミュニケーションは背景化され、この「場」の方が前景に現れる。これにより読者は、登場人物たちのおしゃべりを傍聴する者として、その「場」に居合わせているような感覚を持つことが可能になるだろう。

かくして、登場人物と読者の間に接触の機会が生まれる。無論、現実的な交流ではないが、会話の「場」という仮想空間に一緒にいるかのような感覚、擬似的な共在感とでも呼ぶべきものの生じる可能性が開かれる。

ところで、微視的レベルでセリフをやりとりする登場人物たちとは、もともと作者の分身であった。とすれば、読者が仮想空間で居合わせる相手とは、架空の登場人物の姿を借りた作者であるとも言える。所謂オンラインゲーム等で、アバター²⁸を通してその使用者と触れ合う感覚を持ちうるように、読者は登場人物たちを通して、現実世界においては隔絶されている作者と一つの仮想空間に共存する。そこで交わされる会話の雰囲気をもとに味わうということが、文章を介在させた非対面的なコミュニケーションにおいても起こっているのではないか。

一般に文章、ひいては一方向的なメディアによるコミュニケーションは、知識・情報の伝達という側面のみが注目されがちである。確かに、作者と読者は対面コミュニケーションのように共時的な相互性を持ちえず、また表情のような非言語的な信号を発することも難しい。そのことが、言語による情報を効率よくまとめて伝えるのに好都合であることも事実であろう。

しかしながら、時間的空間的に隔てられているからこそ接触が希求される、と考えることはできないだろうか。いかにコミュニケーション形態が多様化しているように見えても、その土台にあるのは対面コミュニケーションであって、そこから失われてしまった側面を何らかの形で回復しようとするのは、人としてごく自然な反応であるように思われる。

「コミュニケーションとは一つの共存の技術のことなのだ」(金沢 2003: 35-36) という。今回分析を行った会話形式の文章の中にも、作者がテキスト内に設けられた会話の「場」に読者を誘い、その空気を共有しようとする、言わば仮想的な交話的コミュニケーションを指向していると見られるものが存在していたことを指摘しておきたい。

²⁸ アバター (avatar) とは、「インターネット上で自分を表す人形 (イラスト) を選び、髪型や服装、持ち物などを変化させて独自のキャラクター (アバター、分身) を作成し、チャットや掲示板、オンラインゲームなどで利用できるサービス」(清水 2009: 649) を指す。原義は「サンスクリット語で『神の化身』」(同: 1583)。

第4章 まとめと展望

本稿では、会話形式で書かれた文章を通じて行われる作者と読者の間のコミュニケーションとはどのようなものなのか、実際にメディア上に発信されているテキストの質的な分析に基づいて考察することを試みた。架空の会話という設定で書かれた読み物を対象に、登場人物たちの役割関係に注意しつつ、セリフのやりとりの展開のしかたやキャラクターの割り振りを観察する中で、いくつかの興味深い発見が得られた。

既に1.2において、複数の話し手がテキスト中に登場すること、彼らの会話するセリフを中心に構成されることを、会話形式の文章に必要な特徴として挙げた。他の文章形式でも、語り手の創出という行為自体は普遍的に見られることではある²⁹が、複数の語り手が対等に共存するような形態は稀であると言えよう。この複数性こそが、会話形式によるコミュニケーションを読み解く上で重要な鍵となる。複数の人物の視点が本来的に組み込まれていることで、作者の内なる対話で生じる様々な対立を、単一の視点からの「見え」に統合することなく文章化することが可能になるのである。例えば問う視点と答える視点、ある主張に対して相反する見解を示す視点、あるいはより込み入った立場の相違から来る多様な対立構造などを、登場人物同士の関係に投影することで外在化することができる。さらに作者はこの関係を、心内にストックされているキャラクターのイメージを使ってわかりやすく色分けすることもできる。

このように対立する視点が可視化されることによって、読者はそれらが解消されていく過程や、互いに戯れ合うインタラクションの様子を、傍聴者として客観的にとらえられるようになる。また一方の作者も、個々のセリフ内容についての責任を話し手たる登場人物たちに負わせることで、言語主体としての權威を手放し、あたかも他人事のような感覚でテキストに関わることができる³⁰。このように作者と読者は、登場人物を間に介在させるこ

²⁹ 例えば散文形式の言葉も、作者自身が語っているのではなく、その分身である一人の語り手のセリフと見ることができる。しかし本稿での議論においては、コラムやエッセイなど所謂ノンフィクション分野の散文の語り手を作者と同一に見なすことにさしたる障害はないと考えられ、特に区別は行っていない。

³⁰ 余談ながら、筆者は戯曲と小説の執筆経験を通して、セリフの連続でページを埋めていくことの気楽さを実感している。書き手によって個人差はあるだろうが、キャラクターが確立されている場合に関しては、登場人物に任せておいても会話は勝手に進んでいくという安心感が働くように思われる。

とで、互いに当事者として向かい合う緊張を免れた、緩やかなコミュニケーション空間を形成する。そこでは必ずしも情報の伝達や説得を目的とするばかりでなく、主として交感することを指向するようなコミュニケーションも起こりうる可能性がある。

以上は、新聞・雑誌・書籍等から収集した 14 編の個別事例に基づいた考察であって、ただちに会話形式全体の性質として一般化するわけではない。検証のためには、より多くのデータと多角的なアプローチが必要である。さらに、散文形式を含め他の様々な文章形式についても分析を行い、その結果を比較することで初めて会話形式の文章の特質として語る事が可能になると言えるだろう。

会話形式そのものを対象とする研究例がほとんどないために、究明すべき課題はまだ多分に残されている。例えば、3.1 の予備分析で指摘した長ゼリフの間の“谷”に生まれる空白や、Data9で見られたようなイラストによる人物表示、Data14における図表への言及等、視覚的な要素との連関は、テキストデータだけを眺めていても解き明かすことはできない。このような問題については、実際の紙面をデータとして用いた分析が必須となる。あるいは、話し言葉と書き言葉、さらに役割語のようなステレオタイプの表現の混合されたスタイルが、テキストの目的や用途との関係でどのように変化するかという問題も興味深い。これに関しては、コラムのような読み物だけでなく、シナリオや教材、スクリプションといった他ジャンルと比較することも有効であろう。また、日本語以外の言語における会話形式³¹の採用状況を調査し、そのテキストを分析することによっても、有意義な発見を得ることが期待できる。

さらに会話形式によるコミュニケーションは、実は、文章だけを通じて行われているわけではない。テレビやラジオのようなメディアでは、出演者同士の会話を視聴者に聞かせるという形をとるコミュニケーションがより日常的に行われている。ドラマやトーク番組は言うまでもないが、報道番組でも、単独のキャスターがカメラに向かってニュース原稿を読む部分と、キャスター同士が互いに向いて会話する部分が交互に現れるような構成を持つものがある³²。またメディア・コミュニケーション以外に、公開座談会やパネルディスカッションといったステージ・ショーでも、演者がやりとりする様子を客席の聴衆に見せ

³¹ 一例を挙げれば、Berger (2000) に会話形式のコラムを見ることができる。

³² 村松 (2005) はこうしたキャスター同士の会話を分析し、それがニュース解釈のフレームをつくり、視聴者との親しいコミュニケーションを打ち立てる装置となっていると述べる。また東 (2009) は、ニュース番組の中で短いコメントを交わすキャスターたちが、ニュースの送り手でありながら、一時的に受け手として振る舞っていると考察している。

るといふ形態のコミュニケーションが行われる。そうしたショーにおける演者や聴衆の姿勢は、一人の講師が演台から客席に語りかける講演会とは少なからず異なるものであろう。

このように見ていくと、会話形式は文章形式の一つとしてだけでなく、読者・視聴者・聴衆といった不特定多数の受信者に向けられる（基本的には一方向的な）コミュニケーションの形態の一つとしてとらえるべきかもしれない。いずれにせよ会話形式と密接に関わる言語現象は広範にわたっており、その多くがまだ研究の俎上に載せられていないということは指摘しておくべきであろう。

最後に、会話形式と社会との関わりについても触れておきたい。1.3 でも述べたように、現代日本において、新聞を読んでいけば週に数回は会話形式で書かれた記事を目にする。会話形式のスクリーンショットが現代日本の出版物において増加しつつあるという指摘（ミヨシ 1996）や、NHKのニュース番組において、かつてはなかったキャスター同士の会話が最近になって見られるようになってきたことに注目する向きもある（東 2009）。会話形式によるコミュニケーションが実際に過去に比べて増えているのか、現時点では統計的に確かめられたわけではないが、もしそのような傾向があるのだとすれば、この形式の持つ性質と社会の変化との間にどのような関係があるのかについても一考する価値がある。

例えば、会話形式の文章は初心者向けの入門書に多く見られる（マツアリーノ 2008）と言われ、誰でも気軽に読めるテキストとして一般に認識されている感がある。また本稿における考察対象からは除外しているが、小説についても、登場人物の会話部分が多い作品は、地の文が大半を占めるものに比べてより大衆的であるという印象を与えるように思われる。仮に会話で表現される作品は敷居の低いもの、大衆的なものであるというような印象を多くの人が持っているとするなら、大衆社会と呼ばれる現代社会との相関は想像に難くない。そもそも会話形式は、メディアによるコミュニケーションに向く形態であると言える。登場人物または出演者が微視的レベルのやりとりを成立させるためには、巨視的レベルとの明確な区分が必要であり、非対面コミュニケーションの方が都合がよいからである。とすれば、「マス＝メディアの発達による情報の流通によってもたらされる」（現代社会教科書研究会編 2008）大衆文化と接近する可能性は大いに考えられる。

とは言え、本稿で見てきた通り、一口に会話形式で書かれた文章と言っても、様々なバリエーションがある。現代において会話形式に求められているのが気軽さなのか、仮想的な交感なのか、あるいはまだ明らかになっていない別の性質なのか検討するためには、今後さらに慎重な分析がなされる必要があるだろう。

ともあれ、現代は「作家の文章であれ誰の文章であれ、人の文章を後生大事にありがたいのはやめ、素人が自分を表現する時代」(赤祖父 1997)であるという。正しい文章、効果的とされる文章を書くための努力などしなくとも、誰でも自分の好きなようにテキストを作り、世界中に発信することが今や可能になっている。多様な人々が多様な動機で文章執筆に携わるようになったとき、必要とされるのは、よりよい文章を書くための方法論よりもむしろ、より多くの選択肢であると言えるのではないか。会話形式という文章の形態的なパターンも、これから何かを表現しようとする書き手に供される選択肢の一つである。ただ、どのような形態を選択するにせよ、文章は書き手による表現として完結するものではなく、読み手とのコミュニケーションの一環として成立するものであるということを見落としてはならない。会話形式を選ぶか否か、その中にどのような登場人物やセリフのやりとりを組み入れていくかは、作者が読者との間にどのようなコミュニケーションを打ち立てたいと考えているかによって判断されるべきであると言えよう。

会話形式、引いては文章形式の研究は、現代社会におけるメディア・コミュニケーションの諸相を解明していくにあたり、多くの有益な示唆をもたらすはずである。本研究の成果が、そのための一助となることを願いつつ、結びとしたい。

謝辞

「会話形式によるメディア表現を研究したい」——この茫漠とした動機から出発して、本稿を書き上げるまでの間には、多くの問題を解決しなければならなかった。会話形式とはどのようなものなのか。その名称は適切なのか。メディア表現とはどこまでを扱うのか。どのようなアプローチが可能なのか、また、そのうちどれを選択するのか。いや、そもそも、会話形式などというものに、果たして研究上の意義はあるのか。

そうした様々な乗り越えるべき課題を自覚し、進むべき方角を少しずつクリアにしていくことができたのは、ひとえに北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院の諸先生及び院生諸氏によるご助言があったからこそである。特に奥聡先生、鈴木志のぶ先生を始めとする言語コミュニケーションコースの先生方によるご指導は、研究計画の立案や論文・発表のしかたについて学んでいく上でも欠かせないものであった。

また山田義裕先生には、専攻の枠を超えて副指導教員をご担当いただき、折に触れる的確なアドバイスと有益な情報を賜った。先行研究の乏しい中、幅広い視野からのご意見をいただけたことは、この上ない幸甚であった。

そして、まだ研究テーマを十分に練り上げられずにいた段階からその意義を認め、指導教員を引き受けてくださった佐藤俊一先生には、多岐にわたる分野からの知見や参考文献をご教授いただいた。のみならず、研究と仕事との二足のわらじが履きこなせずに焦る筆者を常にあたたく見守り、相談にも快く応じてくださったおかげで、今ここに論文という一つの「文章」を形作ることができたと感じている。この場を借りて、心より感謝を申し上げたい。

参考文献

- Bell, A. (1991) *The language of News Media* Blackwell: Oxford.
- Berger, A. A. (2000) *Media and Communication Research Methods: An Introduction to Qualitative and Quantitative Approaches*. Thousand Oaks, Calif.: Sage Publications.
- 赤祖父哲二 (1997) 『メディアのなかの文章』洋販新書.
- 東照二 (2009) 『人を惹きつける「ことば戦略」—ことばのスイッチを切り替えろ!—』研究社.
- キルステン・アダムツィク／川島淳夫訳 (2005) 『テキスト言語学序説』同学社.
- ジュリア・アナス／大草輝政訳 (2008) 『1冊でわかる プラトン』岩波書店.
- 尼ヶ崎彬 (2005) 「日常言語と詩歌——言語における公共性と親密性」『言語』34(7)、22-30.
- 飯島光孝 (1998) 『実践演劇講座 04 創作戯曲 01』門土社.
- 井山弘幸 (2005) 『お笑い進化論』青弓社.
- 遠藤知巳 (1997) 「手紙の変容・〈声〉の誕生——書簡体空間と『フランケンシュタイン』」
せりか書房編『ミハイル・バフチンの時空』せりか書房.
- 金沢創 (2003) 『他人の心を知ること』角川書店.
- 金田純平・澤田浩子・定延利之 (2008) 「コミュニケーション・文法とキャラクターの関わり」
『言語』37(1)、52-59.
- 神尾昭雄 (1985) 「談話における視点」『日本語学』4(12)、10-21.
- 鴨川卓博 (2000) 『談話、「語り」、ナラティブーディスコースのすがた—』大阪教育図書.
- 川口義一 (2005) 「日本語会話における『会話』とは何か—ある『本文会話』批判—」『早稲田大学日本語教育研究』第6号、1-14.
- 北原保雄・佐久間まゆみ編 (2003) 『朝倉日本語講座⑦ 文章・談話』朝倉書店.
- 金水敏 (2003) 『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店.
- 金水敏編 (2007) 『役割語研究の地平』くろしお出版.
- マルコム・クールタード／吉村昭市・貫井孝典・鎌田修訳 (1999) 『談話分析を学ぶ人のために』世界思想社.
- 久野暉 (1978) 『談話の文法』大修館書店.
- 熊谷智子 (2003) 「シナリオのある会話—ドラマの日本語の特徴—」『日本語学』22(2)、6-14.

- 桑野隆 (2008) 「『ともに』『さまざま』声をだす—対話的能動性と距離」『質的心理学研究』第7号、6-20.
- 現代社会教科書研究会編 (2008) 『現代社会用語集 (改訂版)』山川出版社.
- 甲田直美 (2003) 「ドラマに見られる話題の展開と構成」『日本語学』22(2)、34-42.
- 小林英夫 (1976) 「文体研究のための予備知識」『小林英夫著作集 6 文体論論考』みすず書房、52-64.
- 斉藤千佳 (2002) 「説明的文章における会話文体の機能」北海道大学文学部卒業論文.
- 阪本俊生 (1991) 「トークと社会関係」安川一編『ゴフマン世界の再構成 共在の方法と秩序』世界思想社、101-128.
- 佐久間まゆみ・杉戸清樹・半澤幹一編 (1997) 『文章・談話のしくみ』おうふう.
- 定延利之 (2005) 「『雑音』の意義」『言語』34(1)、30-37.
- 定延利之 (2006) 「ことばと発話キャラクター」『文学』7(6)、117-129.
- 柴田実 (1999) 「放送の会話は自然談話か？」『日本語学』18(11)、16-27.
- 清水均ほか編 (2009) 『現代用語の基礎知識』自由国民社.
- 清水義範 (2003) 『日本語必笑講座』講談社.
- 清水義範・小林幸夫・山田俊治・金水敏 (2006) 「《座談会》ステレオタイプとは何か」『文学』7(6)、4-28.
- 下中直也編 (1971) 『哲学事典』平凡社.
- 鈴木聡志 (2007) 『ワードマップ 会話分析・ディスコース分析 ことばの織りなす世界を読み解く』新曜社.
- 鈴木幸寿編 (1981) 『社会学用語辞典』学文社.
- 高崎みどり・立川和美編 (2008) 『ここからはじまる文章・談話』ひつじ書房.
- 鄭惠先 (2008) 「方言意識の日韓対象—役割語翻訳の観点から—」『日本語科学』23、37-58.
- 坪内稔典 (2003) 『俳人漱石』岩波書店.
- 寺村秀夫・佐久間まゆみ・杉戸清樹・半澤幹一編 (1990) 『ケーススタディ 日本語の文章・談話』桜楓社.
- 中畑正志 (2008) 「プラトンの声」ジュリア・アナス／大草輝政訳『1冊でわかる プラトン』岩波書店、139-54.
- 橋内武 (1999) 『ディスコース 談話の織りなす世界』くろしお出版.
- 畠弘巳 (1989) 「話しことばと書きことば (コミュニケーションのための日本語教育 第

- 10 回) 『日本語学』 8(12)、88-100.
- 秦野悦子・中央大学心理学演習秦野クラス履修生 (2003) 「ドラマの中の子どもの日本語」
『日本語学』 22(2)、77-87.
- ミハイル・バフチン (1930) / 小林潔訳 (2002) 「芸術のことばの文体論」 桑野隆・小林潔
編訳 『バフチン言語論入門』 せりか書房、99-219.
- ミハイル・バフチン / 新谷敬三郎・伊東一郎・佐々木寛訳 (1988) 『ミハイル・バフチン著
作品集⑧ ことば・対話・テキスト』 新時代社.
- 林宅男 (2008) 『談話分析のアプローチ—理論と実践—』 研究社.
- 原宏之 (2007) 『言語態分析—コミュニケーション的思考の転換』 慶應義塾大学出版会.
- R. d. ボウグラント・W. ドレスラー (1981) / 池上嘉彦・三宮郁子・川村喜久雄・伊
藤たかね訳 (1984) 『テキスト言語学入門』 紀伊國屋書店.
- 前田壘構成 (2008) 「『小説の三六〇度=全方位小説』を求めて——古川日出男、『聖家族』
二〇〇〇枚完結直後インタビュー」 『すばる』 2008 年 10 月号、212-226.
- 松尾スズキ (2007) 「解説」 爆笑問題 『爆笑問題の日本原論 3 世界激動編』 幻冬舎、236-243.
- パオロ・マツァリーノ (2007) 『つつこみ力』 筑摩書房.
- 水原明人 (1999) 「作る談話・脚本制作の現場」 『日本語学』 18(11)、28-39.
- 三宅和子・岡本能里子・佐藤彰編 (2004) 『メディアとことば 1』 ひつじ書房.
- 三宅和子・岡本能里子・佐藤彰編 (2005) 『メディアとことば 2』 ひつじ書房.
- 宮崎清孝 (1985) 「文学の理解と視点—認知心理学の立場から—」 『日本語学』 4(12)、41-50.
- マサオ・ミヨシ / 佐復秀樹訳 (1996) 『オフ・センター—日米摩擦の権力・文化構造』 平凡
社.
- 村田夏子 (1999) 『読書の心理学—読書で開く心の世界への扉—』 サイエンス社.
- 村松賢一 (2005) 「ニュース番組における『おしゃべり』キャスター同士の会話は何をして
いるのか」 三宅和子・岡本能里子・佐藤彰編 『メディアとことば 2』 ひつじ書房.
- 泉子・K・メイナード (1997) 『談話分析の可能性—理論・方法・日本語の表現性』 くろし
お出版.
- 泉子・K・メイナード (2001) 『恋するふたりの「感情ことば」—ドラマ表現の分析と日本
語論—』 くろしお出版.
- 泉子・K・メイナード (2004) 『談話言語学—日本語のディスコースを想像する構成・レト
リック・ストラテジーの研究—』 くろしお出版.

- 泉子・K・メイナード（2008）『マルチジャンル談話論－間ジャンル性と意味の創造－』くろしお出版.
- 茂呂雄二（2003）「カットの話法と談話のモンタージュ」『日本語学』22(2)、24-33.
- 柳澤浩哉（2004）「叙述の長さ・詳しさはどのような表現効果を持つか？」柳澤浩哉・中村敦雄・香西秀信編『シリーズ〈日本語探求法〉7 レトリック探求法』朝倉書店、69-78.
- 柳瀬尚紀（2007）『日本語は天才である』新潮社.
- 山口治彦（1998）『語りのレトリック』海鳴社.
- 山口治彦（2007）「役割語の個別性と普遍性－日英の対象を通して－」金水敏『役割語研究の地平』くろしお出版、9-25.
- 山田純（1985）「文における視点」『日本語学』4(12)、32-40.
- やまだようこ（2008）「多声テキスト間の生成的対話とネットワークモデル－『対話的モデル生成法』の理論的基礎」『質的心理学研究』第7号、21-42.
- 山中桂一・石田英敬編（2001）『シリーズ言語態1 言語態の問い』東京大学出版会.

分析データ一覧

<予備分析>

下に記載する本分析のデータのうち、Data1～Data8 の8本を使用した。

<本分析>

I 群

Data1／「ねん太くんと学ぶ ねんきん教室」読売新聞朝刊 2008.5.6

Data2／「これって何？」北海道新聞朝刊 2008.5.9

Data3／「ニュースがわからん！」朝日新聞朝刊 2008.8.7

Data8／「質問なるほドリ」毎日新聞朝刊 2008.5.6

Data10／「知っ得講座 美容・健康編」『Hot Pepper』2007.9

Data11／「親子ニュース教室 デスクに聞いてみよう」読売新聞朝刊 2009.5.8

II 群

Data4／「艶子・潤子のコスメ井戸端会議」『TVnavi』2008.3 綴込広告

Data5／河野俊之・小河原義朗『日本語教師のための「授業力」を磨く 30 のテーマ』（ア
ルク、2006）174 頁

Data7／「ご隠居サマと熊さんのニュースの寺子屋」『ダ・ヴィンチ』2004.8 152 頁

Data9／北海道赤十字血液センター『FOR YOU 献血インフォメーション』Vol.12, No.2,
1999 3-10 頁

III 群

Data6／坪内稔典『俳人漱石』（岩波新書、2003）154-155 頁

Data12／爆笑問題『爆笑問題の日本原論3 世界激動編』（幻冬舎文庫、2007）49-55 頁

Data13／「新しいことをする乳酸菌：LG21」北海道新聞朝刊 2001.8.8 広告欄

Data14／「REPORT IMADOKI」『Hot Pepper』2001.8

[Data1]

(タイトル) ねん太君と学ぶ ねんきん教室 19

(ねん太イラスト) (フキダシ) 税金でまかなう割合は？

(きん子イラスト) (フキダシ) 今は基礎年金の3分の1よ

- 1 ねん太 そういえば、基礎年金には税金も入っているんだよね。
- 2 きん子 その通りよ。実は、給付の3分の1を、国庫負担分として、税金でまかなっているの。
- 3 ねん太 税金の割合を引き上げるという話は、その後どうなっているの？
- 4 きん子 鋭い質問ね。3分の1を2分の1に引き上げる予定なんだけど、まだ財源のメドがついていないの。必要な金額は約2・3兆円で、消費税1%程度だけど、仮に消費税率を引き上げるとしても、なかなか難しいようね。
- 5 ねん太 でも、引き上げは、「2009年度まで」じゃなかったの？
- 6 きん子 そうよ。04年の年金改革で決まったわ。
- 7 ねん太 引き上げが実現しないとどうなるの？
- 8 きん子 将来受け取る年金の額が減るか、今後納める保険料が増えるか、いずれにしろ影響が出るわ。国が公表している保険料と将来の給付は、2分の1への引き上げを前提にして計算しているの。例えば、ねん太君に近い1985年生まれの人が保険料を40年納めて平均寿命まで生きた場合、老後に受け取る額の総額は、納めた保険料の総額の1・7倍だけど、引き上げが実現しないとこの比率は小さくなるわ。
- 9 ねん太 それは困るな。
- 10 きん子 それにね。保険料が免除されている低所得の人にも影響が及ぶわ。全額免除されていても免除期間の国庫負担分は受け取れるでしょ。2分の1に上がらないと、その分少なくなってしまうのよ。
- 11 ねん太 海外ではどうなっているの？
- 12 きん子 ドイツ、フランス、スウェーデンでも、年金給付の一部に国庫負担が入っているの。税金が投入されれば、それだけ、保険料負担の軽減を図ることになるし、給付水準の改善にもつながる。政府は早く約束を実現してほしいわね。

(大津和夫)

<毎週火曜掲載>

[Data2]

(タイトル) これって何？

(大見出し) 買収仕掛けるファンド

(小見出し) 企業経営に積極注文

(小見出し) 増配要求や立て直しも 「高値売り抜け」には批判

(前文) 出版社でアルバイトしている由美さんは、最近新聞で、企業買収を仕掛ける「ファンド」の記事を読んだ。詳しく知りたいと思い、ファンドに詳しい友人で民間の経済シンクタンクに勤める理香さんに尋ねた。

- 1 由美 そもそもファンドって何。
- 2 理香 英語で「基金」の意味。ファンドが多数の人からお金を集めて、成長が期待できる企業や、さまざまな金融商品に投資し、その運用益を出資に応じて出資者に配分しているのよ。
- 3 由美 「スティー爾」「チルドレン」といった外資系の名前をよく新聞で見かけるね。
- 4 理香 米系の「スティー爾・パートナーズ・ジャパン・ストラテジック・ファンド」や、英系の「ザ・チルドレンズ・インベストメント・ファンド」、略してTCIのことね。彼らは「アクティビスト」と呼ばれているのよ。
- 5 由美 それって何。
- 6 理香 直訳すると「活動家ファンド」。「物言う株主」として経営側に積極的に注文をつけるのよ。企業価値に比べて株価が割安の上場企業の株を一定程度まで買い増した上で、株主として経営改善や増配などを求めようとするわ。
- 7 由美 経営側にとっては、態度が高圧的に見えたり、経営の弱点をつつかれたりして不快よね。
- 8 理香 高値で株を売り抜けることだけを目的にされると、経営は混乱する。本家の米国でも「グリーンメーラー」（株を買い占め高値で売り抜ける者）と批判された例があったわ。
- 9 由美 利益を売るという株主の権利だけでなく、企業を良くするという役割も大事ね。
- 10 理香 ぬるま湯につかっている経営陣はショックを与えないと奮起しない、というファンドの言い分もあるけど、荒っぽいだけでは経営陣との対話にならないし、日本人がファンドに持つイメージが悪くなってしまう。

- 11 由美 良い面もあるのかな。
- 12 理香 経営が監視されることで、経営陣に緊張感が出るわ。事業を一番、よく知っているはずの経営者が真剣になれば従業員のためにもなる。
- 13 由美 スティールが日本企業の株を買うと言っては騒動になるなど、日本では外資系ファンドをなるべく排除したい気持ちがあるのかな。
- 14 理香 難しい質問ね。何でも排除しようとする外国投資家は逃げてしまうわ。問題はそのファンドの狙いね。不振企業などの支配権を、賛同を得た上で握り、長期的に立て直そうとするファンドもあるよ。
- 15 由美 うちの勉強嫌いの弟も立て直してよ。

[Data3]

(タイトル) ニュースがわからん！

(ホー先生イラスト) (フキダシ) 悪評の「終末期相談」どうなった

(見出し) 凍結中。延命治療の相談例をまず調べることに

- 1 ホー先生 今年4月に後期高齢者医療制度と同時に導入され、同じく評判の悪かった「終末期相談への診療報酬」というのがあったのう。
- 2 A 相談の対象になるのは、医師が「回復を見込むことが難しい」、つまり、終末期にあると判断した75歳以上の患者だ。患者本人と家族、医師らが診療方針について話し合っって書面にした場合、医療機関側に終末期相談支援料として2千円が支払われる制度だった。入院中の場合は、連続して1時間以上、時間をかけるのが条件だ。
- 3 ホ そうじゃった。
- 4 A 病状が急変して危篤状態になった場合、救急車を呼んで病院に搬送するのか、人工呼吸器をつけるなどの延命治療をするか、といったことをあらかじめ相談しておく。一部の医療機関では無報酬で実践されてきた取り組みを支援するのが目的、と厚生労働省は説明している。
- 5 ホ けれども、医療費抑制が本音だと疑われた。
- 6 A その理由の一つが厚労省の職員が書いた高齢者医療制度の解説本だ。「家族が1時間でも、1分でも生かしてほしいと要望して治療がなされ、500万円とか1千万円の金額になってしまう」といった記述があった。野党などから「高齢者に終末期の治療を差し控えさせて、医療費を抑制する狙いだ」と批判された。与党からも「国民感情を害したなら廃止してもよい」という声が出た。
- 7 ホ 今は「凍結」なのか？
- 8 A 舛添厚労相が「意図は善意でも終末期医療を後退させる危険性がある」と判断し、6月25日に、この診療報酬を決めた中央社会保険医療協議会（中医協）に諮問した。「やむをえない」という答申が出て、「別に厚労大臣が定める日」までは、無期限凍結となった。
- 9 ホ 終末期の医療について、患者の意思を尊重すること自体が否定されたのではないじゃろう。いつかは「解凍」されるのか。
- 10 A 舛添さんは中医協に対し、今年度中に相談支援の実態調査をし、結果をまとめるよう要請した。相談支援が75歳以上の患者に限定されたために不安を招いた、とい

う反省もある。年齢にかかわらず、がんで終末期を迎えるといった人にも対象を広げ、再実施できるかどうか議論する予定だ。

(浜田陽太郎)

[Data4]

(タイトル) 高品質なのにプチプライスだから毎日きちんとエイジングケア

(見出し) 進化した保湿が叶える！ “キメ・ハリ・ツヤ” 美肌

- 1 潤子 私の肌って、同期のコたちに比べて老けて見えるみたいなんです…。
- 2 艶子 潤子、それはズバリ潤い不足が原因よっ！ 若いと思って油断しているようだけど、肌のエイジングは20代に始まっているの。
- 3 潤子 ええっ、もう!?
- 4 艶子 そう。肌の美しさや見た目年齢を左右する “キメ・ハリ・ツヤ” は、年齢とともに衰えていくものだけど、アテニアのエイジングケア研究によれば、同じ年齢でも潤い不足の人ほど衰えの程度も高いんですって。エイジングケアのスタートは、早いに越したことはないのよ。
- 5 潤子 でも、エイジングケアって手間もお金もかかりそうだし〜。
- 6 艶子 そうくると思ったわ。でも「アテニア スキンケアシリーズ」は、簡単にながちりエイジングケアできて、しかもお手頃価格！
- 7 潤子 先輩、私も同期のコたちに負けない “キメ・ハリ・ツヤ” を取り戻したいっす！ オスっ!!
- 8 艶子 お、急にやる気が出たわね。決め手は攻めの “アクティブ保湿” よ！
- 9 潤子 外から水分を与えるだけの保湿とは違うんですか？
- 10 艶子 イエス！ “アクティブ保湿” は、独自の浸透テクノロジー「極小ナノ アクアカプセル」や、世界初配合の保湿成分「珊瑚草エキス」などによって、潤いを確実に届けながら肌の奥から保湿力をアップさせる、新時代の保湿なの。
- 11 潤子 だから、毎日の3ステップだけで、肌の内側から見た目年齢ケアまでばっちり？
- 12 艶子 その通り！ さらに、1万件以上のアンケート、約4000人のモニターの声から試作を繰り返してつくり上げた、敏感肌にもやさしい極上の使用感も大きな魅力ね。
- 13 潤子 心地よくお手入れできて、おまけに若々しい美肌になれるなんて夢みたいですよ。今日からアテニアで、エイジングケア・デビューです！

[Data5]

(見出し) 学習者は実際に何を話している？

- 1 導夫先生●今日は会話の授業でしたね。どうでしたか。
- 2 実帆子●はい、結構うまくいきました。
- 3 先生●そうですか。何がよかったんですか。
- 4 実帆子●ロールプレイも楽しそうだったし、学習者も学習した文型を使ってたくさん話すことができました。
- 5 導夫先生●実際に学習者はどんな発話をしていましたか。
- 6 実帆子●え？
- 7 導夫先生●本当に文型を使って話をしていましたか。
- 8 実帆子●いや、ペアがいくつかあったので、全部は見えていないんですが。
- 9 導夫先生●じゃあ、ちょっとロールプレイの場면을ビデオで観てみましょうか。
- 10 実帆子●……あれ、このペアは文型を全然、使ってない。
- 11 習太●このペアは使ってるけど、その前にやったパターンの単語を入れ替えただけだね。それに入れ替え方が間違ってる。
- 12 実帆子●このペア、先に終わったのかと思ったら、全然違うこと話してるみたい。
- 13 導夫先生●ところで、この授業の目的は何ですか。
- 14 実帆子●学習した文型を使って依頼ができるようになることです。
- 15 導夫先生●文型を使ってたくさん話せば、実際に依頼ができるようになりますか。
- 16 実帆子●え？
- 17 導夫先生●例えば、改まった相手に何かを依頼するときに、いきなり「～てください」って依頼しますか。それに、断るときにはっきり断りの表現を使いますか。
- 18 習太●それは失礼ですね。まずは理由を言ったりするかな。
- 19 実帆子●その前に「すみません」とかって言うかも。
- 20 習太●そうか、文型を使って話すだけじゃ、実際の場面では使えませんね。
- 21 導夫先生●いろいろな文型を出しても、それらをいつ、誰に、どのように使うのかわからないと、使えないですよ。
- 22 習太●そうか。学習者は、相手がどんな人だからどんな表現を使うとかって、全然わかってないですね。
- 23 実帆子●文型が言えるようになること以外にも、いろいろ必要なんですね。

[Data6]

(見出し) 三条の上で逢ひけり 朧月^{おぼろづき} 季語・朧月(春)(明治31年)-74-

- 1 漱石 前回、月並みが話題になったが、この句はどうだい？ 私はね、大いなる月並みは名句である、という説を掲げたいねえ。この句は句稿二十九(五月ごろ)に出ているよ。
- 2 子規 いや。名句は次第に月並みになる。月並みが名句であるのではないよ。たとえば芭蕉の、
古池や蛙飛び込む水の音
は、出来たときはとても新鮮だった。
- 3 稔典 歌ばかり歌っていた蛙が、急に飛ぶ蛙になったのですからね。
- 4 子規 そう、そう。「手をついて歌申^{もうし}あぐる蛙かな」(宗鑑)と、それまでの蛙は歌ってばかりだった。ところが、芭蕉は古池にキャプンと飛ばせた。その後、この句が有名になると、こんどは次第に月並みのようになった。飛ぶ蛙にみんなが慣れたからだ。
- 5 漱石 うん。今の解説はさすがに冴^さえている。月並みという言葉に平凡という意味を与えたのは子規君だが、でも、何が月並みかは実際は判別がむつかしいね。
- 6 稔典 「吾輩は猫である」に月並みを話題にする場面がありますね。苦沙弥先生の奥さんが、家に来る皆さんはよく月並み、月並みと言うが、それはどのようなものかと美学者の迷亭に尋ねる場面です。奥さんは「何でも自分の嫌いなことを月並みと云うんでしょう」と辛辣です。
- 7 漱石 迷亭の答えは、「この日や天気晴朗とくると必ず一瓢を携えて墨堤に遊ぶ連中を云うんです」だったね。
- 8 稔典 ええ、そして、「中学校の生徒に白木屋の番頭を加えて二で割ると立派な月並が出来上ります」。
- 9 漱石 うん、うん。「馬琴の胴へメジヨオ・ペンデニス^{ペンデニス}の首をつけて一、二年歐洲の空気で包んで置く」と月並みができる。
- 10 子規 だんだん分からなくなるじゃないか。迷亭の解説はともかく、君の今回の句は、三条の橋、朧月の取り合わせが月並みだ。いかにも京都、つまり、通俗的で平凡な京都の情緒を作っている、その取り合わせは。この句の月並みの判別はむつかしくないよ。明瞭に月並みさ。
- 11 漱石 おやっ、東京弁を使ったね。たしかに、三条大橋の上で、しかも朧月の下で逢

うというのは、あまりにも絵のような逢い引きだねえ。でも、時々、このような月並みにどっぷり浸りたくなる。それが人間のおもしろいところだね。根が俗なんだ、我々は。

- 12 子規 うん。僕だって、会席料理が食べたいし、小遣いも欲しい。根が通俗という説にはおおいに同感だ。だから、月並みに意識的に向き合いたいんだよ、僕は。ともあれ、発想や表現が陳腐で類型的なもの。それが月並みだよ。

[Data7]

(タイトル) ご隠居サマと熊さんのニュースの寺子屋

(リード文) 新聞、ニュースで騒いでいても、どうもイマイチ腑に落ちない。あんな事件にこんな事件、いったいどうして起きてるの？

平成の床屋政談、「ニュースの寺子屋」最終回。思えば連載開始以来、不安になるようなことばかり。混迷する日本の、明日はどっちだ!?(ご隠居は本当に隠居します)

文／吉崎宏人

●今月のテーマ どうして次から次へと不安になるようなことばかり起きるの？

- 1 ご隠居「んー、ま、なんだな。佐世保の事件には参ったな」
- 2 熊さん「小6の女子児童が、同級生をカッターナイフで殺害した事件ですね。彼女の『心の闇』って何なんでしょう」
- 3 ご隠居「精神分析をしたところで、本当のところはわかるかどうかなんてわからない」
- 4 熊さん「被害少女のお父さんもそんなことを言っていました」
- 5 ご隠居「痛ましいね」
- 6 熊さん「あたしが子供のころにね、シージャック犯人が射殺された場面がニュースで放映されたんですよ」
- 7 ご隠居「ああ、昭和45年の『ぷりんす号事件』だな。44人の乗員乗客を人質にとって観光船に立て籠もった」
- 8 熊さん「母親の説得にも応じず、デッキでライフル銃を乱射」
- 9 ご隠居「全国に実況中継される中、犯人は警察のライフル班に胸を撃ち抜かれた」
- 10 熊さん「ものすごいショックを受けましてね。ショック状態が何日か続いたほどでしたよ。今見ると、映像の迫力はそれほどじゃないんですけどね」
- 11 ご隠居「今のドラマや映画のほうがよっぽど迫真だ」
- 12 熊さん「つまり麻痺しちゃってるんじゃないですかね。刺激みたいなものに」
- 13 ご隠居「過激な暴力シーンの出てくるものは規制すべきだと思うかい」
- 14 熊さん「少なくとも子供が簡単に見られねえようにすべきじゃないですかね」
- 15 ご隠居「カッターによる殺害方法は、TVドラマがヒントだった」
- 16 熊さん「あと、中学生同士が殺し合う小説『バトル・ロワイヤル』にも感化されてたっていうし、暴力サイトへもしょっちゅう行ってたっていいですよ」

- 17 ご隠居「しかし自由経済は、産業もメディアも、人々のエスカレートする欲望を満たしながら回るものだよ」
- 18 熊さん「欲望の刺激を煽りながらね」
- 19 ご隠居「肥大化に向けて転がりだしたものは、欲望も刺激も情報も、そう簡単に止められるものじゃない」
- 20 熊さん「規制にあまり意味はないと」
- 21 ご隠居「社会は悪くなったと思うかね」
- 22 熊さん「思いますね。テロ、ピッキング、外国人犯罪、北朝鮮、BSE、SARS、鳥インフルエンザ、それに少年犯罪の凶暴化。日本はどう考えてもヤバい」
- 23 ご隠居「どうしてこう不安や恐怖が増えたんだろうね」
- 24 熊さん「事実そうでしょう？」
- 25 ご隠居「ちょっと目先を変えたとね、そういう全体的なムード自体が、じつは一番危ないと思うのだ」
- 26 熊さん「えっ、どういうことです」
- 27 ご隠居「相対的な比較をするのは適切ではないのかもしれないが、日本は世界でも殺人率がほぼ最低であり、1950年をピークに下がり続けている」
- 28 熊さん「はあ」
- 29 ご隠居「若者の殺人率も、他国と比べてきわだって低いのだ」
- 30 熊さん「しかしイメージとして、凶暴化して軽々と殺人をやってしまう若者が増えた、という印象がありますね」
- 31 ご隠居「たとえば、銃所持者の数でいえばアメリカよりカナダのほうが『銃社会』だ。だが銃による殺人はアメリカが圧倒している」
- 32 熊さん「どうしてです？」
- 33 ご隠居「アメリカが、つねに恐怖をかきたてつつ、隣人への不信感を煽っているからだと思わざるをえない。アメリカの殺人率は20%減っているのに、殺人事件のニュース報道は600%増加しているという指摘もある」
- 34 熊さん「不安の原因は『恐怖の過剰生産』。日本もそうなっていると？」
- 35 ご隠居「不安や恐怖は商売になるからね。しかしそれだけじゃない。権力にも都合がいいのだ。ここで『バトル・ロワイヤル』の構造を思い出してみよう」
- 36 熊さん「恐怖や不信を煽って、クラスメート同士で殺し合いをさせる」

- 37 ご隠居「基本的な最小の動きは、生徒たちの『孤立化』。人をバラバラの個人へ還元し解体してしまう。孤立化して無力になった個人は、外側の大きな力——国家や独裁者という統一的な全体性へ吸収されていくものなのだ」
- 38 熊さん「それが『成功したファシズム』と主人公が言う小説の舞台、『大東亜共和国』ですね」
- 39 ご隠居「個人主義と全体主義は、実は相反しないのだ」
- 40 熊さん「暴力シーンだけがクローズアップされて騒がれたけど、よくできた小説なんだな」
- 41 ご隠居「現実社会でも、子供を心配しているつもりで実は憎悪を芽生えさせはじめているのでは、と思うことがある」
- 42 熊さん「うむむ……」
- 43 ご隠居「おそらくこれからも、我々が恐怖や不安に陥るような事件は次々と報道されるだろう。その事件自体を憂慮することとは別に、『恐怖の過剰生産』を疑ってみる必要はあると思う」
- 44 熊さん「昔のほうがよかったのかな」
- 45 ご隠居「『過去に正しい答えがあった』というのは前近代的な世界観。キリスト教もマルクス主義も、過去に理想郷を設定して、それを目指した思想だ」
- 46 熊さん「それも『外側の大きな力』ですね。宗教もイデオロギーも全体主義もある意味同じだ。最後の質問です。ご隠居にとって正しい答えとは？」
- 47 ご隠居「『正しい答え』が必ずどこかにある、という考えを持たないことかもね」

[Data8]

(タイトル) 質問なるほドリ

(見出し) 先発薬と後発薬の違いは？

(見出し) 成分は同じ 添加物に違いも 価格は最大5倍の差

- 1 なるほドリ ジェネリック医薬品って、聞き慣れない言葉が新聞に出てたね。
- 2 記者 日本語でいう「後発医薬品」のことです。薬には、特許を取った新薬（先発薬）と、後発薬とがあります。新薬の特許は20年から25年で切れるため、その後に別の製薬会社が同じ成分で作るのが後発薬です。新薬をまねる後発薬は開発費が少なくてすむので、価格は新薬の2～7割になります。
- 3 Q どう違うの？
- 4 A 薬の成分は先発薬と同じですが、固めたり、着色したりする添加剤は異なる場合があって、健康被害につながる心配がゼロではありません。以前は「後発薬は体内で溶けにくい」という指摘もありましたが、今は溶解の試験にも合格した薬だけが流通しています。長期間薬を飲み続ける患者には薬代が安くすみ、高齢化で増え続ける医療費を抑えることにもつながります。
- 5 Q じゃあ、かなり普及してるのかな？
- 6 A 必ずしもそうではありません。日本での普及率は医療用医薬品全体の約17%です。これに対し欧米は5割前後に達しています。政府は12年度までに30%に引き上げることを目標にしている、その間の医療費を約5000億円減らせると見込んでいます。
- 7 Q 後発薬の普及が進まないのはなぜ？
- 8 A 後発薬のメーカーは中小企業が多く、薬の供給や情報提供の態勢を不安視する医師が少なくないからです。また医師にとって、高い新薬をメーカーに頼んで安く仕入れれば、差益を稼げるという事情もあります。薬局も先発薬と後発薬の両方を用意する手間を避けるため、積極的に使ってきませんでした。
- 9 Q 何か有効な対策はないのかな？
- 10 A 厚生労働省は、後発薬を処方すれば診療報酬が加算されるよう誘導するとともに、今年度からは医師が「変更不可」としない限り、患者の希望で後発薬を処方できるようにしました。ちなみに、厚労省は4月1日付で生活保護の受給者向けに「指導に従わずに新薬を使い続けたら、保護の打ち切りも検討する」との通知を自治体に出

しました。明らかに行き過ぎなので、通知は撤回されました。

あなたの質問をお寄せください

※連絡先省略

回答・清水健二（社会部）

[Data9]

(見出し) もっと安全な輸血を。はじめました「NAT」。

(女イラスト) (フキダシ) ついにNATがはじまったよ～！

(男イラスト) (フキダシ) イエーイ！！

- 1 男「……」
- 2 女「ホントはよく分からないんでしょ？」
- 3 男「うん…ナニ？ ナットって。」
- 4 女「NATは Nucleic acid Amplification Test の頭文字で“ウイルス核酸増幅検査”って意味…」
- 5 男「じゃ、オレ今日はこれで…」
- 6 女「最後まで聞いてよ、ここからが大事なんだから！いままで血液のウイルス検査の方法は？」
- 7 男「確か…抗原や抗体検査だよな。」
- 8 女「ピンポ～ン、やるじゃん！でそれを具体的に説明すると？」
- 9 男「と来ると思ったんだよな～。分かりません！」
- 10 女「ウイルスってものすごく小さくて、しかも感染してもすぐは少ないからとても見つけにくいの。」
- 11 男「フムフム」
- 12 女「そこで抗体に目をつけたの。人間は身体にウイルスなどの異物が入ると血液中に抗体をつくるの。」
- 13 男「分かった。ウイルスは見えなくても抗体なら見つけられるというわけだ。」
- 14 女「その通り。それが抗体検査なんだけど大きな弱点があったの。」
- 15 男「弱点って？」
- 16 女「ウイルスに感染してから抗体がつくられるまでに時間がかかるの。」
- 17 男「なるほど、その間だと感染を見つけれないんだ…。」
- 18 女「うん。それを検査の空白期間（ウインドウ期）というんだけど、そのウインドウ期の短縮を実現したのがNATなのよ。」
- 19 男「ウインドウ期が短くなれば、それだけ血液の安全性が高くなるというわけだ。で具体的にはどんな検査なんだい？」
- 20 女「直接ウイルスを見つける方法なの。」

- 21 男「えっ！だってウイルスは小さいからすごく見つけにくいんだろ。」
- 22 女「だから見つけやすくするの。まず薬品で血液中のウイルスのカラをやぶって、DNAかRNAを取り出す…」
- 23 男「また難しくなってきた…DNAかRNAっていえば遺伝子だよな。」
- 24 女「そう、それを試験管のなかで100万～1億倍に増幅させるの。」
- 25 男「1億倍！…なるほど1個じゃ見つけにくいウイルスも1億個あれば見つけやすくなるというわけだ。」
- 26 女「そう。それがNAT。」
- 27 男「うん分かった。輸血を受ける患者さんがこれまで以上に安心できるってこともな。」
- 28 女「飛躍的に安全になったのは確か。でも決してウインドウ期がゼロになったわけじゃないのよ。」
- 29 男「そうだな。やっぱり大切なのはこれまで通り献血する側の意識なんだな」
- 30 女「そう。ウイルス感染の恐れがあった人は絶対献血しない。そして問診には正確に答える。それが大切ね。」
- 31 男「そして俺達みたいに若くて健康な人間がバリバリ献血することが大事だな。よ～し患者さんのためにガンバルぞ～。」

[Data10]

(タイトル) 栄養の先生から聞く 知っ得講座 美容・健康編

おいしく食べて、キレイで元気なカラダになろう！

(大見出し) 女の子の強〜い味方 キレイの源、大豆に注目！

サユリ●22歳 (営業/OL 1年目)

(フキダシ) お豆腐はよく食べるけど、豆をそのまま食べることって少ないわ。

ヒロコ●23歳 (事務/OL 1年目)

(フキダシ) 豆乳製品が増えたけれど、私はどうも苦手だわ〜。

(リード文) 豆乳を使った製品が定着し、注目の大豆。キレイのためにたくさん食べたいけど……。先生、大豆を手軽に摂る方法、ありますか？

栄養士のミナミ先生●35歳

(フキダシ) 今回は「畑の肉」といわれる大豆を手軽に摂る方法をご紹介します。豆乳にもスポットをあててみます。豆乳の嫌いな人、必読ですよ！

(小見出し) [大豆の栄養] 現代女性の強力な助っ人 大豆のパワーを知る

- 1 ヒロコ●大豆って、わりと周期的にブームがやってきますよね。どんな栄養成分が含まれているんですか？
- 2 先生●大豆は、特に女性にたくさん摂ってほしい食品なんです！ 大豆はカラダの素となる良質なタンパク質を多く含み、またイソフラボンという、女性ホルモンの分泌低下を補う作用のある成分も豊富。女性ホルモンに関連して起こる乳がんなどの病気の予防にも効果があるといわれています。さらに、血行をよくし、健康な肌を保つのに効果があるとされるレンチンや、腸のリズムを整えて消化吸収を助けるオリゴ糖も含まれていたり、大豆ってものすごく優秀な食品なのよ。世界的にも、ヘルシーな食材として大豆やお豆腐が注目されているし、私たちも負けずに大豆や、大豆製品を食べるようにしましょうね。
- 3 サユリ●お豆腐はよく食べるのですが、大豆は、なんかめんどくさいイメージがあって。簡単に食べられる大豆料理を教えてください。
- 4 先生●大豆の水煮は、いろんな料理に仕えて便利なんですよ。そのままスープやみそ汁

に入れてもいいし、サラダの中に加えてもおいしいし。ごはんを炊く時に大豆の水煮を入れて、しょうゆと酒を少し加えれば、簡単に、大豆の混ぜごはんができあがります。

(小見出し) [豆乳をもっとおいしく] 苦手な人ほどハマる！？ 豆乳の活用法を知る

- 5 ヒロコ●ところで先生、私は、豆乳がちょっと苦手です……。でもカラダにはよさそうだし、挑戦してみたいんですが。
- 6 先生●豆乳は大豆をすりつぶして加熱するとできるものなので、「豆」だと思えばよいのですが……。牛乳と比べてしまうと、たしかに豆乳は独特の風味があって、苦手な人も多いようです。でも、最近では、ずいぶん飲みやすい豆乳ドリンクが売られているんですよ。まずは飲みやすくおいしいものを人に聞いて飲んでみると、豆乳の印象が変わるかもしれません。それから、豆乳を使った料理は、意外なおいしさの発見があると思いますので、もぜひ試してほしいですね。

まず、簡単にできるのが豆乳入りのみそ汁。みそ汁に少し加えるだけです。豆乳もみそも、元は同じ大豆ですし、そう思うと違和感が薄れるかも。それから、キムチ鍋。豆乳を入れると、とてもまろやかな味になるんですよ。あとは、シチューに加えたり、オムレツを作る時に加えたり。牛乳を料理に使う時、少し豆乳を入れるようにすると、豆乳の用途がぐっと広がるし、とってもヘルシーですよ。

監修／Office LAC-U 虎石真弥

[Data11]

(タイトル) 親子ニュース教室 デスクに聞いてみよう

(大見出し) 「エコポイント」ってなに？

(リード文) 今月 15 日から、家電製品を対象とした「エコポイント」という制度がスタートします。二酸化炭素 (CO₂) 排出量を抑え、地球温暖化を防ぐねらいと言います。どんな仕組みなのでしょう。

(小見出し) どういう仕組みなの？——省エネ家電を買うと次回値引きされるんだ

- 1 **アトム** 「エコポイント」って、なんですか？
- 2 **デスク** 消費電力が少ない冷蔵庫やエアコン、地上デジタル放送（地デジ）対応テレビを買った人が、購入額の一部を「点数（ポイント）」として受け取り、次の買い物の時にポイント分を値引きしてもらえる制度だよ。このポイントを「エコポイント」と呼び、5月15日の購入分からもらえる。ただし、2009年度の補正予算が国会で成立することを条件としているんだよ。
- 3 **ウラン** どんな仕組みなのかしら？
- 4 **デスク** エコポイントがもらえるのは、省エネ性能が優れている冷蔵庫、エアコン、地デジ対応のテレビだ。冷蔵庫とエアコンは購入価格の5%程度、地デジ対応テレビは購入価格の10%程度と、購入時に同種の古い家電製品をリサイクルした場合はリサイクル料分が、共にエコポイントとしてもらえる。これは、5%程度から十数%の値引きをするのと同じだね。例えば、30万円の地デジ対応テレビを買った場合は、約3万円程度と、リサイクル料分のポイントがもらえる。
- 5 **アトム** 何に役立つの？
- 6 **デスク** エコポイントをきっかけに、電力をたくさん使う家電製品を、電力を節約できる新製品に買い替える人が増えれば、日本全体の省エネルギーが進むね。そうすればCO₂の排出量が減って、地球温暖化の防止に役立つ。買い替えが活発になれば、不況が続く中で、景気対策の効果も期待できる。
- 7 **ウラン** 対象の製品になにか目印はつくのかしら？
- 8 **デスク** 政府が1日に発表したステッカーが付くことになった。「エコポイント対象商品」と書いてあるので、一目でわかるよ。

(小見出し) 買うとき気をつけることは?——領収書などを保管しておいて

- 9 **アトム** 買うときに気をつけることは?
- 10 **デスク** 買った製品や日付、お店、買った人が記入された領収書、保証書をちゃんと保管しておくこと。古い家電製品をリサイクルした場合は、家電リサイクル券の排出者控えも保管してね。
- 11 **ウラン** 購入後、どうやってポイントをもらうの?
- 12 **デスク** じつは、その手続きはまだ政府が検討中なんだよ。
- 13 **アトム** エコポイントは何に使えるの?
- 14 **デスク** それも、まだ検討中。「次に別の省エネ製品を買うときに使えるようにしよう」とか「いや、どんな製品を買うときでも使えるようにしよう」とか、様々な意見が出ている。
- 15 **ウラン** エコポイントで、CO₂の発生は、どのくらい抑えられるの?
- 16 **デスク** 環境省は、省エネ家電への買い替えが進み、買った製品を10年間使ったとすると、今後10年間で4000万トンの以上のCO₂削減につながると見ている。
- 17 **アトム** ところで、日本では年間どのくらいのCO₂が排出されているの?
- 18 **デスク** ざっと13億トン。
- 19 **ウラン** そんなに! 世界全体ではどれくらい?
- 20 **デスク** 2005年に世界で排出されたCO₂は約266億トンだった。このうち、アメリカが22.0%を排出して1番多く、次が19%の中国。日本は4.7%で国別では4番目だった。
- 21 **ウラン** 人類が排出しているCO₂の量に比べると、エコポイントの効果はちょっぴりなのね。
- 22 **デスク** それでも、出来ることから実行していくのは大切と思うよ。
- 23 **アトム** そうだね!

(脚注) 川戸直志デスク (経済部) から

エコポイントは、地球温暖化を防ぐ対策と、景気対策の「一石二鳥」を狙った新しい制度です。わが家のブラウン管テレビも購入から11年。いよいよ買い替え時かな。

(囲み) アトム 10万馬力と、純粋な心を持つロボット。ウラン アトムの妹ロボット。

[Data12]

(見出し)「新潟監禁」「てるくはのる」の巻

(注) ●00年1月28日—新潟県三条市にて、小学4年生の女性が行方不明になっていた事件で、約9年2ヵ月ぶりに柏崎市内で女性を発見、保護。監禁していた佐藤宣行容疑者が逮捕された。●99年12月21日—京都市の小2男児が殺害された。この事件で翌年2月、京都府警から任意同行を求められた岡村浩昌容疑者が逃走、団地から飛び降り自殺を図った。犯行声明文には「てるくはのる」という暗号があった。●写真は女性が監禁されていた佐藤容疑者の自宅。

- 1 田中——京都の小学生殺人事件と、新潟の少女拉致監禁事件。ここんところ、立て続けに大きな話題が続いているよね。
- 2 太田——岡村君と佐藤君。
- 3 田中——お笑いコンビじゃねえんだよ！
- 4 太田——最近どっちがどっちの事件だったか、わからなくなるんだよな。警察がミスしたのはどっちだっけ？
- 5 田中——どっちもだよ！ 皮肉な言い方するなよ！
- 6 太田——ああそうか、警察が現場で取り逃がしたのが京都で、現場に行かなかったのが新潟か。
- 7 田中——わざわざそんな覚え方しなくていいんだよ！ しかし、どっちにしろホント、警察のミスが目立つよね。京都の事件なんか、捜査員十九人で行ったんだよね。でも結局、逮捕令状を持ってなくて、犯人の岡村が「公園でなら話してもいい」って言って、みんなで公園に行ったんだよな。
- 8 太田——“公園デビュー”ってやつだな。
- 9 田中——違うよ！ それで、公演で話してるウチに逃げられちゃった。捜査員十九人もいたんだぜ、いったい何をやってたんだらうな。
- 10 太田——七人がすべり台で滑ってて、六人がジャングルジムに登ってて、二人がブランコに乗ってて、四人は後ろで順番待ちしてたって。
- 11 田中——バカか！
- 12 太田——公園に行ったら遊びたくなっちゃったんだらうな。
- 13 田中——そんなワケねえだろ！ しかもその後の警察の発表も、最初は犯人はマンションの十三階から飛び降りたって言ってたのが屋上になったりと、言うことがコロコ

口変わってて、なんだかあやしいんだよね。マンションの住人の話によると、“ドーン”という大きな音がして、外に出たら若い男が地面に血を流して倒れてたっていうんだけど、その音がする直前に男の言い争うような大声を聞いたっていう証言もあるし、なんとなく警察はまだ何か隠してるんじゃないかって感じもあるんだよね。

- 14 太田——あと、地面に血を流して倒れてる男を見た直後に、警察と犯人が言い争うような声を聞いて、その後、“ドーン”という音が聞こえたっていう証言もあるんだよね。
- 15 田中——そんな証言ねえよ！ 何だよソレ、何がどうなったんだよ！ 不思議すぎるだろ！ とにかく警察が犯人を自殺させちゃったことによって、この事件の謎の部分は解明されないままになっちゃったんだよね。例の犯行声明文の暗号とかね。
- 16 太田——“のいるこいる”な。
- 17 田中——“てるくはのる”だよ！ “のいる・こいる”は漫才師だろうか！ そんなんだったら謎じゃねえよ！
- 18 太田——あれ見たとき、最初、文字を並べ替えると、“やくみつる”になるんじゃないかかと思っただけだな。
- 19 田中——どこをどう替えたらなるんだよ！ 文字数すら合ってねえじゃねえか！ それにしても、新潟の女性監禁事件に関しても、警察のミスはひどいよね。あの佐藤ってのが、少女を誘拐したときは、まだ執行猶予期間中だったんだからね。にもかかわらず、警察の捜査線上にも浮かんでこなかったんだから。
- 20 太田——本当の意味での執行猶予だよな。
- 21 田中——くだらねえこと言うな！
- 22 太田——アレも、最初、保健所と病院があの女の子を見つけて通報したときに、警察は「そんなことまで、警察に持ち込むな」って言ったらしいからな。
- 23 田中——ひどいよな。
- 24 太田——この事件、警察に持ち込まないで、ほかにどんな事件を持ち込めっていうんだよ！
- 25 田中——まったくだよな。しかしそれでも、女性は無事保護されて、まあ、よかったといえばよかったんだけど、とはいっても約九年間、監禁されてたわけだから、この空白は大きいよね。その間、世の中の状況も変わってるだろうし、きっと最初はビックリするだろうね、なんてたって九〇年に誘拐されてんだからね。
- 26 太田——「えっ！ “たま”って今、全然売れてないの!？」なんてね。

- 27 田中——そんなことじゃねえよ！
- 28 太田——でも、話によると、監禁されたなかで、テレビだけは許されていてよく観ていたって話だけだな。
- 29 田中——そうなんだ。
- 30 太田——だから、おそらく彼女にとっては、テレビだけが唯一の社会と自由につながる接点だったんだろうな。
- 31 田中——そうだよな、どんな番組を観てたんだろうな。
- 32 太田——『電波少年』の“なすび”に夢中だったらしいよ。
- 33 田中——結局監禁されてんじゃねえかよ！ 何が自由との接点だよ！
- 34 太田——監禁されてる人間にとっては“なすび”はヒーローなんだろうな。
- 35 田中——そんなワケねえだろ！
- 36 太田——しかし、あの事件に関しては、これからの報道の仕方を気をつけたほうがいいよな。特にあの女性に関しては、心に相当の傷を受けてるわけだから、なるべくならマスコミもあまり報道せずにそっとしておいたほうがいいような気がするな。
- 37 田中——そうかもしれないね。しかしわからないのは、あの母親だよな。九年間一緒に暮らして、うすうす二階に人がいるのはわかっていたけど、女性の姿は一回も見えてないって言ってるんだよね。
- 38 太田——そんなワケないと思うけどね。
- 39 田中——そうだよな、母親が見てないはずないよな。
- 40 太田——そりゃそうだよ、家政婦だって見てるんだから。
- 41 田中——関係ねえだろ！

[Data13]

- 1 家来 つつしんで申し上げます。はだかの王様。
いま巷では、LG2 という乳酸菌が評判でございます。
健康番組でも何度か取り上げられており、現代社会に貢献する新しい高付加価値
ヨーグルトとして・・・
- 2 王様 わしも、国づくりに貢献しておるぞ！
- 3 家来 LG21 乳酸菌は、人類の健康に貢献しており各国からも注目が。
- 4 王様 わしも、各国を訪問すると注目されるぞ！ なにせ、はだかじゃからな。
- 5 家来 それはそれとして、王様。この LG21 乳酸菌は、なにかと大変な世代の中老年、
特に、40 歳以上を中心に支持率が高くなっております。夫にたべさせたくて
奥様を買われるケースも多いそうです。
- 6 王様 わしも、40 代じゃ。いろいろ大変じゃ。激務じゃ。
- 7 家来 ことの始まりは、明治乳業という会社が「プロバイオティクス」という分野の研
究技術を使って、
自然界に無数に存在する乳酸菌のなかから見つけたそうです。
- 8 王様 難しい話はよい。ちょっと行って、買ってこい！

ブームは終わり、日常になりました。

新しいことをする乳酸菌：LG21

www.meinyu.co.jp

[Data14]

(タイトル) REPORT IMADOKI

研究メンバー

タケシ

乙女座、A型。海外旅行の際は入念な下調べをし、現地の地理はもちろん、簡単な日常会話も頭に入れてから旅立つしっかり者の25歳

リエ

射手座、B型。お手軽な海外旅行へは誘われるとついつい行ってしまい、豪遊(?)のツケにあとから苦労してしまううっかり者の23歳

第17回研究テーマ「今年はどこに旅行する？」

(見出し) グルメにショッピングにリラックス OLの活力の源は旅行にあり！

(リード文) 最近旅に出ましたか？近場の温泉1泊旅行から海外旅行まで、目的や予算に合わせて賢く選ぶOLさんたちが増えているようです。その傾向を調べてみました。

(小見出し) 今年も行きます！ 函館、東京、ハワイに韓国…

- 1 タケシ「いや～、日常を離れた旅行はリフレッシュに最適だね！なんか、こう、仕事に対するやる気が前以上に湧いてきた感じ」
- 2 リエ「信じられな～い！この忙しい時期に有給取ってイタリアへ行ってきたなんて！」
- 3 タケシ「いいだろ、年に一度のことなんだから」
- 4 リエ「ま、いっか。私も台湾旅行で休んだし…。上のグラフは過去1年間に1泊以上の旅行をした人の割合です」
- 5 タケシ「3回以上という人が3割も！みんなどこへ行ってるの？」
- 6 リエ「複数回答で、道内が55%、国内が55%、海外は32%ですね」
- 7 タケシ「ちなみに人気の場所は？」
- 8 リエ「道内のトップは函館、国内は東京・横浜のテーマパークがダントツ、海外はかなりばらつきがあって、上位はハワイ、韓国、グアムとなっています。先輩が行ってきたイタリアはランクインしてませんが」

- 9 タケシ「え、そうなの？いいトコでしたよ、みなさ～ん」
- 10 リエ「どうもヨーロッパって高そうなイメージがありますよね」
- 11 タケシ「そうかなあ。旅行費用にはどれくらいかけているの？」
- 12 リエ「道内は旅行期間の平均が2.5日で2万3000円、国内は3.5日で6万円、海外だと6.7日で15万円という平均値が出てますよ」
- 13 タケシ「なるほどね。で、今年の予定は？」
- 14 リエ「予定回数は去年と変わってないですよ。」
- 15 タケシ「予算は？」
- 16 リエ「このグラフです。10～15万円がトップですね」
- 17 タケシ「二番目は30～50万円だよ！」
- 18 リエ「注目すべきは旅行予定先なんですよ」
- 19 タケシ「去年と変わってる？」
- 20 リエ「道内では、去年7位だった北湯沢が函館に次いで2位。国内では新しいテーマパークの影響で大阪・京都・神戸が1位の東京・横浜に迫る勢いなんですよ」
- 21 タケシ「へ～、なんか、また旅に出たくなってきたなあ」
- 22 リエ「いい加減にしてください！」

(小見出し) 8割の人が海外旅行を経験 いつかは行きたいイタリア

- 23 タケシ「リエの旅行目的って何？」
- 24 リエ「そりゃあ、美味しいもの食べて飲んでリラックスして…」
- 25 タケシ「それって、普段の生活とおんなじじゃん」
- 26 リエ「言われてみれば…。でも、これが旅行目的の上位を占めてるんですよ。あとは美しい自然・景色を見たい、地域や国の文化・慣習に触れたいなんて高尚な意見も」
- 27 タケシ「旅行先を選ぶポイントはあるの？」
- 28 リエ「道内なら温泉があることが最大のポイントでしょう、やっぱり。国内だと食べ物と値段が同率トップ、次が話題のスポットですね。海外になると値段が手頃であることがトップになってますね。次がショッピング」
- 29 タケシ「女の人って、どうして旅行に行ってまでショッピングなわけ？わからんな～」

- 30 リエ「海外だと日本よりず〜っと安く買えるものがあるんですよ。買わずにはいられないじゃないですか！」
- 31 タケシ「海外旅行へはかなりの人が行っているの？」
- 32 リエ「ほぼ8割の人が海外旅行を経験してますね」
- 33 タケシ「行ったことがない人の理由はなんだろう」
- 34 リエ「お金がない、休みがとれない…というところですね」
- 35 タケシ「借金をして、無理矢理休みをとって行く人もいるけどね」
- 36 リエ「え、誰のことですか？」
- 37 タケシ「左のグラフは行ったことのある旅行先だね」
- 38 リエ「アフリカやインド、モロッコ、フィンランド、ロシアといった少数意見もありましたよ」
- 39 タケシ「いいね、オレも行ってみたいな、そういうとこ」
- 40 リエ「いつか行きたい場所のトップはイタリアですよ」
- 41 タケシ「いいトコですよ、みなさ〜ん。で、リエは今度はどこへ行く予定なの？」
- 42 リエ「今度っていうか、新婚旅行は世界1周する予定で〜す」
- 43 タケシ「それまで『世界』が待っててくれればいいけどね」

Texts Written in Conversational Form and Media Communication

-The Manner of Exchanges of Lines by Characters-

SAITO Chika

These days we see many types of writings on the media such as newspapers, magazines, books, or Internet sites. This paper deals with one specific type of text: texts written in “conversational form.”

We sometimes come across a column or an article in a newspaper or a magazine which is written as a dialogue form, instead of using an ordinary prose statement. In such a text, we find some characters who talk to each other. The text usually consists of the characters’ names and their lines with few or no narrative part. Why are they written in such a form? We may find an answer to this question by analyzing those texts published actually on the media and focusing on the communications between writers and readers.

There is little research available on conversational form itself. However, we can get some suggestion from observation of drama discourse, illustrative sentences in textbooks of foreign language, interviews in magazines and books, or philosophical texts like the Dialogues of Plato. For example, a conversation between characters within a text is not a copy of natural conversation but have some unique features as an artifact (Kumagai 2003). So it seems that they have some similarity to conversation in fiction. It is characterized by “double structure of communication,” which is assumed to consist of two levels of communication: “the micro-communication” between the characters, and “the macro-communication” between the writer and readers (Yamaguchi 1998, 2007). Through analyzing the

manner of exchanges of lines by characters, therefore, we can know something about the nature of the macro-communication that influences it.

The data for this study are 14 texts which I have obtained in articles in newspapers, magazines, books, or a leaflet. These are classified into three groups according to what kinds of roles are played by characters in the micro-communication: Questioner and Answerer, Teacher and Student, or any other case. Then we see how characters exchange their lines in each group. Texts of the first group are composed of simple repetition of question and answer, while the second group has the story in which characters cancel their temporary opposition and reach an agreement in the end. In the latter case, characters seem to talk to each other as if there were a sort of “the preestablished harmony.” In contrast with this, it seems that each of the characters in the third group behaves in his/her own way and sometimes insert a small talk into the conversation. Furthermore, the personalities set on the characters are also seems to differ between the three groups.

Considering these facts, the communication in conversational form is unique in some respects. For a writer, the conversation by characters seems to be a result of deformation of his/her latent, internal dialogue. So the characters can be seen as the writer’s alter egos. They shoulder a burden of responsibility for their speeches in place of the writer and put him/her into the background. Then readers can think themselves as the auditors of the characters’ relaxed chat, but not as the addressees spoken to. If so, there is possibility that some texts in conversational form could be characterized as not only transmission of information but also “the phatic communion” between the writer and readers in which they are enjoying the same communication space together.